

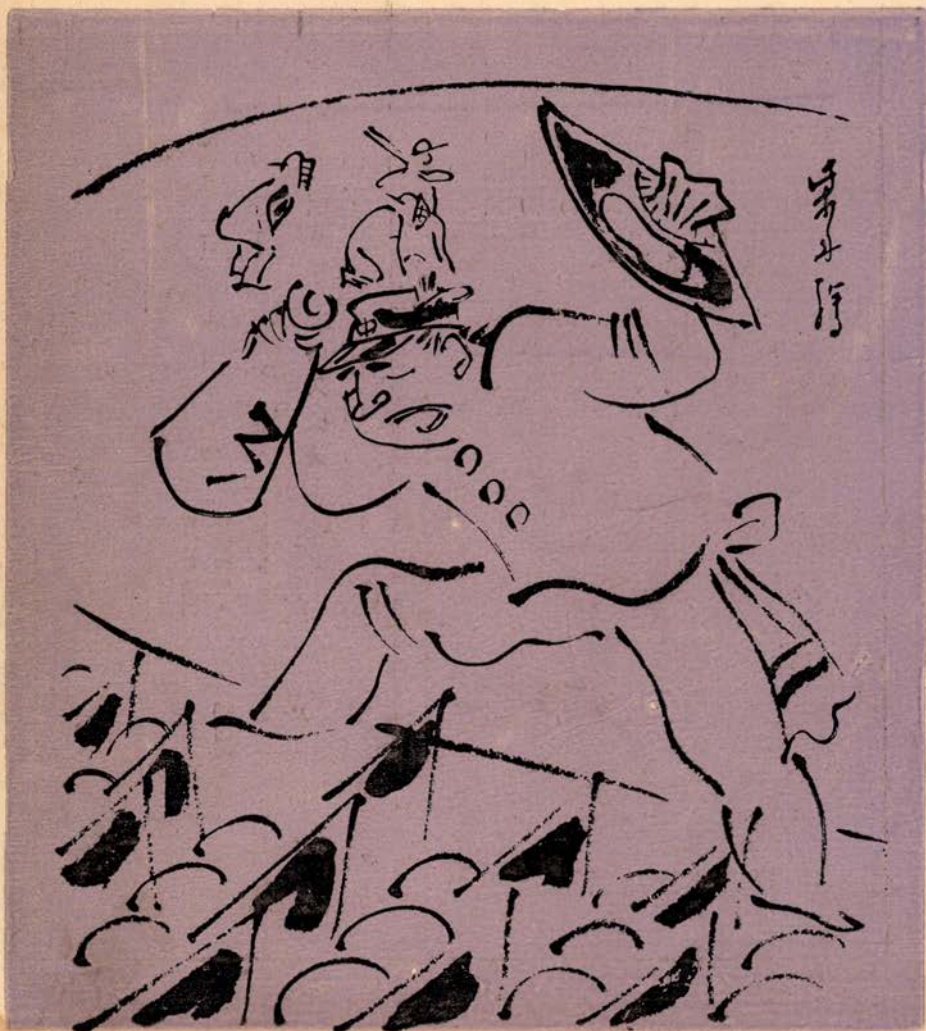
郎路生麻・幹主

川柳雜誌

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
大正十五年八月一日發行（每月一回一日發行）

川柳雜誌 第三卷八月號

川柳雜誌社發行



川柳雜誌 第三卷第八號目次

感想・評論

木村半文錢

黑木莢豆

森東魚

安川久流美

麻生葭乃

研究·其他

麻生路郎

あびす・せい二

駒井美の作

萬よし生

吉岡鳥平

あそを・よしの

柴谷柴舟盡

▲募
集
句

塚崎 松郎選

かほろ・馬行共選

刀三・葭乃共選

二柳子記

雙柳報

各地柳壇・川柳家戸籍調べ・遠近太興里

路
郎
生

麻生路郎

林田馬行

黑木莢豆

高橋かほる

庄萬よし

西垣松雨

喜田飯山

塚崎松郎

松本助六

矢田右大臣

麻生叟乃

岩崎柳路

橋本二柳子

蛭子省二

諸家



近作

麻生路郎

見上ければ二階に椅子の端が見え
のろけるこゝを姉も妹も
きつちりゝ坐はれば膝の女にて
このごの疲れさんでりやは重し
時の力もあをきかなしみ
水をうつ音子の走る音二階にあれば
誕生日子をならべても面白し
すべりんこ親は涼しいこで待ち



名詞止の句

句作上の常套語法(三)

麻生路郎

『濱邊まで見^みにやらされる許嫁^{いぬめ}』や『犬洗^{いぬあらい}ふこも仕事の濱^{はま}の家^{いへ}』のやうに、下の句が、名詞止となつた句について書いて見やう。

試みに『柳樽^{やなぎだん}』をのぞいて見る。名詞止の句が隨所^{しうじょ}にある。『武玉川^{ぶぎょくせん}』を繙^{ひもと}く。かなり澤山^{たくさん}ある。殊に『武玉川^{ぶぎょくせん}』の短句^{たんご}へ十四字詩^{じゅうしじし}には、それが多い。殆んど四分までは、さうだ云つてもいい。それ等の佳句^{けいご}を拾^{ひろ}つて見るに、

罪になるさは知らぬ寐^ねすがた
横柄^{よこがら}に賣^うる寺^{てら}の妙藥^{めうやく}
問はれて見れば見殘^{みざ}した京^{きやう}
寒い形^{かたち}に出来るこんやく
足を洗つて聞けば買^か水^{みづ}

佛の出端^{でうたん}もむらさきの雲^{うみ}
忘れたやうな寺^{てら}の元日^{げんじつ}
うしろへ捨てるこねぎりの咳^{せき}
ひごりに見せる髪^{かみ}に半日^{はんじつ}
損^{そん}から先^{まへ}へ咄^{はな}す商人^{しやうじん}
女房^{にようばう}に惚^ほれて家内^{けいだい}安全^{あんぜん}
一先夢^{ひとしりし}の覺^さめる三十^{さんじゅう}
顔^{かほ}にかけ値^ねのやうな白粉^{おしろい}
立ちすがた見て見たい寐^ねすがた
うつくし過ぎて入れにくい傘^{かさ}
無筆^{むふで}の女房^{にようばう}持つて極樂^{ごくらく}
色^{いろ}には出^でさぬ京^{きやう}の貧乏^{びんぱふ}
雨^{あめ}まで譽^{ほめ}めて戻る仲人^{なこうど}

勿論以上の句は其の一部に過ぎないのである。毎句に名詞止

めの句が、なせ多いかといふことはあとで説く。

明治時代の句には、矢張り、名詞止の句が澤山ある。『柳

樽』と比べて大した違ひはないやうに思ふが大正に入つてから

は段々減少した。例へあつても佳句に乏しい。では古句の名詞

止には佳句が多いかといふのに、あながち、さうでもない。

古句にも、現代句にも佳句が、なせ乏しいかと言へば、名詞

止は、上の句、中の句に於て、多くはそのものゝ單なる説明で

あること、たゞへ情緒を髣髴たらしめたことしても、下の句が名

詞止なること全體が重い感じがして、足に鎖をつけた囚人の

やうな不自然な句となることが多いのに原因するやうに思ふ。

上の句に名詞を据えた場合にも、これに似た缺陷を感じる場合

がある。

又、短句に名詞止の句の多いのは、句の姿が七七の二句とな

るため、それ等の内容を描出する助辭が省略され勝ちとなり、

主として内容の中心となるべき名詞が露骨に表現されて来るか

らであらう。

從來名詞止の句は幼稚であること云はれてゐるが、全部が全部

さうでないところを見るに、一般に名詞止の句に對する特別の

注意が拂はれてゐないのに原因するものと見て差支なからう。

一 音 の 句

やはやは引つ立てて聞く葡萄の値

(評) 寫生句の上乗。軽い穿ちもある。綺麗な句である。上品な句

である。「し」からる、所迄行く京の寺」なども綺麗な句である。私は

京の東山を歩く、いつも此の句を思ひ出す。

入王と聞いて火を引く料理人

(評) 客が將棋をさしてゐる。それが入王となつたと聞いたので料

理人が火を落してしまつたといふ穿ちの句。入王とは王將が敵地へ

深く遣入つてしまつたこと。入王になるさなか、勝敗がつかない

のである。

見詰めても戀しい足しにならぬ空

(評) 淋しい心境を詠んだ句である。いい句だ。空が生命である

私の古い句に「空ばかり見てゐる息子異見され」といふ句がある。主

觀の句と客觀の句。

辻切を見ておはします地蔵尊

(評) 作者自身の皮肉が横溢してゐるが、私はこの句を讀むと作者

のれらつた皮肉よりも現代の社會組織に對してゐるんなことを考へ

させられた。「驚かれてむつくさ起さる金飛脚」にしても、「此の地

藏尊」にしても、名詞止めがよく利いてゐる。

四五人の親は見ぬ舞の袖

(評) いつまでも若々しい、人の親を皮肉つた句である。現代社會

界の婦人のやうに、孫が出来ても、今日は婦人會、明日は音楽會と

騒ぎ廻はつてゐるのに比べる昔の婦人は窮乏だつたに違ひない。

うそをつく聲をくさ染物屋

(評)「むだ足を一日おきに紺屋させ」で、「ヘイ」明後日は必ず出

來ます」など、平氣で言つてゐたらしい。そこで「うそをつく聲をく」を藥物屋」を皮肉られたのであらう。又流行らぬ紺屋に對しては「約束を違へぬ紺屋あはれなり」と浴びせかけてゐる。

こゝにあげた「うそをつく聲をく」を藥物屋」の句は單なる穿ちで、あまりすぐれた句ではない。

世を捨てゝ先づさびしさは膳の上

(評) 一讀平凡に見ゆる、が決して凡想ではない。世はすてたが、膳の上の淋びしさまでは思ひ及ばなかつたのであらう。岡本一平氏の「泣き寺の夜話」に描かれた老人が膳の上の淋びしさに絶へられて水でつくつた魚を皿にのせて楽しむところがあるが、この句には、かなり複雑な感じが感ぜられてゐると思ふ。

ぶちまけて二夕足逃げる炭俵

(評) ステツチの句。輕い穿ちもある。斯うした句はなるほど巧く言つてあるといふ以外に、人生に觸れるところがないから句の價值から云へば第二義第三義的のものである。傳統派がふるはなくなつたのは、斯うした句に、あまり興味を持ち過ぎた結果である。

初心者がよく疑問を懷くのは、斯の句のやうに「二夕足逃げる」と斷定することの可否である。古句には斯うした數字的に斷定した句が随分澤山あるが、この斷定は、よほどびつたりしない限りは却つて句の價值を削めるから今日ではあまり用ひられない。右の「二夕足逃げる」の句の場合などは、かなり巧みな方である。

追手でも來ますかご聞く渡守

(評) 世を捨てたやうな渡守ののんきな境涯。スバリく煙草を吸ふてゐて、いつ船を出さうにも思へない。「ねは、船頭さん早く渡して下さいよ」こども云はうのものなら「エへ……さうせかいでも日は暮れはさせぬぞ。それさ追手でも來ますかなア」

遠くから浴衣を投げる許嫁

(評) 許嫁には、はつかしさも無遠慮がある。人情の機微を描へた句

客を斬るやうに數へる料理人
(評) 誇張の面白味を味ふべき句。「口程に餓の裂けぬ料理人」といふ穿ちの句もある。

一今の句

小切手が一枚それが手切金
赤ン坊ヘキツスなごする社會主義
要するにブルジョア級の坊主刈
金持の庭へ來てゐる池の水
人の子の衰れおちよほの細い帶
設計をくさして通る紺紺
弟子連れて恵方へ詣る請負師
雲雀啼いたごてまぎれましよ赤椿
赤ン坊を仰せつかるも姉の家
大水の中にまします石地藏

朝陽夫人を悼みて

ふご見ればつかひてのない齒磨粉
嘘をつく事に馴れたりビルデング
天國へ一直線に乙女の死
惚れ合ふた仲まは見ねぬ大掃除
誰はばかりす内の人内の人
返辭しておいてかいてる腰飾
襦衣一枚で書いた勞働運動史
茲にかゝけた今人の名詞其の佳句のなかで、英豆の「ひばり啼いたごてまぎれましよかね赤椿」は失戀を色濃くだし飯山の「ふご見ればつかひてのないはみがき粉」は涙の結晶詩だ。松郎の「誰はばかりす内の人内の人」に至つては無技巧の技巧の句として推賞に値する。(つゞく)

吐露樓 花城 竹榮 馬行 屏三 柳葉 葵豆 飯山 同 刀三 同 公郎 同 路郎 同

六厘坊遺聞と外二三

木村半文錢

前號の拙稿『忘れ得ぬ事ども』を、雜誌が來てから讀むと、何んだかバカゼンミした書き方で、六厘坊の事やら、私の事やら、その邊がややこしい。頭の悪い私が書いたものとして、讀者諸氏もがまんをしていたゞきたい。序に、二三の補遺を書いて置きませう。

小島六厘坊は、本名を善右衛門と云ふた。商人としては善右衛門、仲の能い友達には善之助——と自ら笑つてゐたが、いさゝか善右衛門には參つてゐたらしい。尤も其の頃の傾向としては、俵夫の子供でも政治家や軍人向きの、むづかしい名前をつけてゐたのであるから、十九や廿歳時代の六厘坊も、多少善右衛門を他人に憚つてゐたやうだ。或は、これは私一人の想像であるかもしれないが——

六厘坊は、心齋橋北詰の小島洋服陳列場にゐた。店員とは別

に、大きなデスクを前にして正面を向いてゐた。這入つて行くに『ヤアー』と満面の笑顔で迎へてくれた。が、店では川柳を談じない。直ぐ、陳列場の奥にある倉を改造した室へ誘ひ込んだ。うす暗い氣味の悪い部屋だ。茲で一時間か二時間、獨り立つつけの川柳談があるか、但しは句を作らせられた。そして『拙い拙い』と頭からキメつけられたものだ、なか／＼並大抵では褒めない、が、褒めかけるさ度が逸れて褒めそやす、誰れやらの句に『六厘がほめりやミこぎりほめる也』のその通りである。反對に、褒めなけりや、ミこぎりくさすのである。この鬼門に對つた者は、大抵ミこめを刺されたものだ。彼の『角戀坊は馬鹿である』の攻撃や、虹衣氏に對する態度なき徹底的であつた。年齢の若い加減もあらうが、あゝ徹底的な主張を筆にのほせないものだ。

それに六厘坊の語術はあつぱい優れたものであつた。雄辯といふものを如實に見せたものではある。殊に句の講釋に秀でゐた。いかにも、六厘坊が褒めて解釋するに、惹きこまれて思はず感嘆させられた。語術が秀でゐるからである。

六厘坊は、性至純であつてあはて者でもあつた。故人ひさごが口癖に「あいづは馬鹿だ」云つてゐるが、いく分滑稽味もあつた。句會で時間をみるのに、自分の銀時計を忘れて来る時に故人柳珍堂の金時計をかりた。「あつはッは……やつぱり金は重いなア……僕等も早う大きいなつて金を持たうぜ」ミ、折柄隣に座つてゐた私の肩をぶつたが、可なり痛かつた。

句會の散會前に、折柄帽子掛に掛けてあつた柳珍堂の帽子をわざミ一寸失敬してきてみる「柳珍堂のバナマはやつぱりほんものだ」ミ笑はした。そして自分の麥藁帽を無造作に冠り直しては歸途についた。

別れ路まで連れ立つて歸つて来るに、そこで「じゃ失敬」ミいふが早いから、くるツミ尻をまくつて駆け出しては、六厘坊の無邪氣さをみせた。それが大抵の場合くり返されるから六厘坊の性格の一端も分らうといふもの……

陣列場では、六厘坊ミ日車氏の七厘坊が、よく句の上の主義

で争ふて、直ぐ絶交したその中へ這入つて一度私は困つたが、それでも二三日……早い時は翌日……又、七厘坊君が姿を見せてゐるが、亦してももめては絶交した。

六厘坊の文字は、いゝ感じを與へた。秩父流を洒脱にしたものだ。その頃は、たいいてい六厘坊に敬意を表するものは、みな六厘坊流の筆辭ミなつた。私もその一人。まだ其のころの垢が今にこれない。

新町の砂場(寺(名前を忘れた))も何度も會場にした。一度遅れて出席した私は、六厘坊からあミで聞いたのだが、その頃久良岐氏によく書かれた下山京子さんが來阪して、句會へ出席した。記念のために——いふので寫眞を撮つたが、六厘坊の毒舌ミ諧謔は、たうく京子さんをして、レンズの前に立たせる勇氣を失はせたさうだ。それ以來、京子さんは、一度も句會へ顔出しをせぬやうになつた。

句會で、六厘坊の隣へ座るに、大抵はまるつて了ふ。大體披露者だから上座に居るのであるが、よくチョコ／＼移動しては誰の席にでも座つてしやべつた。自分は速吟の方であるからいゝものゝ、若し遅吟であるか、苦吟でもしてゐたら頗る迷惑だ。時間に制限があるのだから、さり返しがつかない。それでも相手選ばずしやべる。放れ業ミいふべきは、このしやべ

りながら句がス、い、い、出来る事だ。いやべつては書き、書いてはいやべりするのでなしに、それが同時に行はれてゐたのは、一寸人間業ではない。出来た句のよしあしは別にしても――。

今、『叢書』で八公タンを紹介する、やすもの、歡樂場である俗に一錢屋と稱する小屋へは六厘坊も亦出掛けて立ち見してゐた。私は一回は中で遭ひ、一回は京與(今の角屋)の横で、見ての歸途だといふのに遭つた。當時の千日前の一錢屋(實はもう二三錢に値上げしてゐたが)は、今の數島俱樂部の向ひ側で、たしか横井座の焼け跡であつたやうに思ふ。六厘坊は、その頃出かけた小芋といふ、一寸曾我の家十郎を思はせるやうなヒョーキで、少し低能のころの俄師を酷く氣に入つてゐた一座は、眼玉の東家力太郎と、日露の戦地から歸つた四旅八のガスト、いゝが人氣があつた。

亦、六厘坊はさういふ小屋へ行くにしても、五錢なれば五錢二錢なれば二錢と入用だけ手に握つてゐた。

私の従兄の只英が入營するので、祝賀會を開いてくれた。この時六厘坊は大量酒をきこゝめたが、さう大量ではない。ガブ飲みで二合位――併し、酒をのむさなかくのト機嫌で、當百氏と座敷のまん中で角力を取つたが、たうく、へドを吐いて參つて了つた。

私は一度ビックリさせられた事がある。それは、私の家の砂糖工場が今宮にあつた。(今の久保田鐵工所のある所、然し、アンな大きな面積でないから驚いてはいけなない)工場の戸口で涼み床を出して、いゝ氣嫌に晝寢をしてゐたのは私だが、それが突然地上に投げ出された。六厘坊が訪ねて来て、窃つて涼み床をひっくり返したのだ。なか／＼六厘坊といふ人は茶目氣があつた。

一葉女史の『たけくらべ』を強制的に讀まされたものだ。あの、少年期の芽さめて行く淋しさを六厘坊も非常に感銘してゐたらしい。それにしても、その方面の事は私には分らない。日車氏がたしかに知りぬいてゐるやうと思ふが……。

魚崎出生生所へは、一度も見舞に行けなかつた、日車氏が、さき／＼出かけて、都々逸を唄つては、寝てゐる六厘坊を苦しめたものだが、ハガキはよく頂いた。それに、六厘坊は達筆であるが、そのまゝに皆な名文を形成してゐた。これも亦、その人の天分の豊かなところであつたやうだ。

前號で、東夷氏との争端の因を知らぬと書いて置いたが、あれの原因を今思ひ出した。殊に私に關係したところがあるので、それを附け足しておく。

浪花樽の狂句で六厘坊を攻撃した。それは新報柳壇の選者として六厘坊が、川柳の狂句の事に就いて先手を打つたものだ。だから、浪花樽で應酬した。私の句に

六厘坊もはや三文の値打ちなし

六厘坊四拾五入で及第し
のあまの句が大層癢に觸つて、さてこそ浪花樽まで出陣した。なぜ後句が虫に觸つたかといふに、六厘坊は市岡中學で、英語がヒドク悪いので、その句のやうな始末であつた。だから「人身攻撃も、いでは人格を侮辱するものだ」ミカンくになつてゐた。句者の私はそれを知らない。ただ、四三五の數ミ、六ミの字もじりであつたのだ。それを一夜、陳列場で聞いた時、句者が私で、句意がそれであつたミ云へば、「さうか——」と始めて大笑した。罪のない咄しだが、

六厘坊は、市岡中學を中途で退學した。それが常人ミ變つてゐる。ミ云ふのは、退學する前に、國文の教師にヒドク肝癢にふれてゐたが、十日ばかり學校を休んだ間に、言海か言葉の泉かで、充分に國文のむつかしいところを調べあけて、そして出校した。國文の時間に、むつかしい古語を讀ねては先生の顔の色が艱ふなるのを痛快がつたり、すこし間違つた答へをするミ「それは斯うでせう」ミ反對に、さしくミ解釋して、先生をいためたつた。それ以來退學して了つたのだ。——い。

句會の歸途、よく歩きながら小便した。小便をちづゝしてゐるミ、みんなから遅れるので、歩きながらやる。この心理状態には微妙な味がうらにある。

葉柳の外に「土國子」ミいふ小型のものをだした。アレは新報の短篇小説に二等を得た其の金を利用したのだ。よく「一度みんなに旨いものを喰はしてやらう」思つてゐるが「ミ咄してゐる。併し、みんなに土國子を遂々喰はせた譯けだ。話しの序に、その次の小説は日車氏が二等になつた。六厘坊は「さうしても一等をくれないなア」ミこぼしてゐた。一等は五十圓、二等は二十圓だつたミ思ふ。

前號に、六厘坊周囲の人々の中に、水平坊を入れて、三太郎をいれてない。尤も、この三太郎は東京の人ミは違ふ。堺の人で、綿谷ミいふのだが、葉柳の終刊前には可なり活躍してゐた。なぜ入れないかといふに、あの人の句は、多くは歌の雑誌「心の花」から失敬してゐたのだ。ヒドイのはその儘がある。さすがの鋭い眼の所持者六厘坊も一杯喰つたのだ。発見したのは私——。

故人木谷ひさごは、先代彌太夫さんの息子である。蓬吟氏の實弟であるのは勿論。帝大で心中を研究してゐたさうだが、このひさご氏が帝大卒業後、大學院へはいる前後に、静岡邊の

中學校で教鞭を執つたことがある。たしか三年か四年の受持ちで、國文の専門である一應教科書で川柳のころになつた。ひさご氏も、いまだ日頃の蘊蓄を傾けやうとするに、生徒の方で一步進んでゐて、例の『書もたんすのくわんがなり』を初めバレ句ばかりを出して句意を聞かれたので、先生のひさごの方で顔が赭くなつたさうだ『いまさきの生徒は油斷がなりませんよ』と大阪へ來た時の咄しを、一寸そのまゝ。

前號の編輯後記を見るに、路郎君も私も永い間知らなかつたらしい。私は、あれ以上の印象を何うしても再現できない。みんなで思ひ出して書いてみて下さい。

あの拙稿で、久しぶりに五葉氏からハガキをいたゞいた。御健在の事何より——私も返辭を出して置いた。その外に、もう反響はありませんか。『半文銭革新より逃けたり』なごの反響は書かぬ事。

拙著『川柳の作り方』が、今度『川柳作法』と改め、四六版になつた。だが紙型はもとのまゝ、それへ少し革新派の事を書き足して置いた。ヒドク値段が高くなつたが、あれは私のふところへはいるのではない。大阪の商人はみなあの式だ。私にするに、普及版（それほどの原稿でもないが）としてでも出したいくらいだが、實行できない。併し、こんどは私が装幀の字を書いて置いた。たのんだ繪がおくれたの、一方新しくたのんだ人が非常にマズイ繪であつたさうで、たう／＼私の拙い字をフン

ダンに使つてしまつた。いさゝか多く書きすぎて渡して置いたのが手落ちだ、だが、私の「か」字でも見たいと思ふ諸君は見下さい。必ずしも買ふてくれは云はぬ。が、雑誌の出る時分には、既に『なアーんだ拙らぬ』と嘖んで吐き出されてゐるかもしれない。

近頃革新派にるこをヒドク氣にする人があるらしい。わざ／＼所謂を冠したりしてゐるが、アレは何ういふ意味だらう？ 私の思ふには、舊い川柳では、もう駄目だと思つたら、ツイが革新なんだ。句の傾向を意味せずに、心の革新だ、心が革新すれば革新派じやないか。生命主義でも、未來主義でも、知情一如主義でも、傾向主義でも、それはお互の主張である。革新派にはサンプルがないといふのはその事だ。川柳のためにでは急進する。むしろ漸進主義を假裝するよりは、さうして行く處まで行つて仕れる——その方が何んなに藝術的であらう私は、こゝろで氣づきながら、感情の上で革新派たることを避ける人々を卑怯だと思ふ。敢て、強制や勸誘はしないが……。

俳人放哉の安心を知つてヒドク心をうたれた。彼の井泉水氏に宛た手紙をみて、なぜか私は涙が落ちた。よく『死』を徹した人だ。近頃の快心事でもあつた。が——あの、死を速める覺悟は、決して逃避でない。私も、なるべく悲慘な死に方をして社會制度の缺陷に酬ひたいと思ふて居るが、さうも死ねぬ。なかなか死ねぬ。何といふ悲愴で、そして皮肉な死に方だ。はッはッ。

近作柳樽
麻生路郎選

小生を小生に見る淋しさよ
若い日のいたづら人の一人なり
ウインドへ女の心みだれたり
そんな氣もこんな氣も出る若さなり
月給は兎に角靴の減つたこと
獨酌の是だけ飲んだなご思ひ
世間からは賤しい家業の女にて
夕刊に間違ひごこの多き日よ
金力に依らぬ世間が欲しいのか
勘定のにぶい男に貯まる金
氣にかゝる父母の事さへ旅の味
佛壇に咲いた櫻は別なやう
わたし等も義理は別よぬかしり
病院へあてつけらしう咲く櫻
コダツクで撮る戀人の別な顔
敵娼よ又寛ろいで眠るのか
あれきりの手紙で友は遠ざかり

同同同同同同同同同同同同同同同廣
島

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同斗

追ひかけて今度は暗い舞臺なり
菜の花へ蝶遠廻りして止まり
摘草の持ち役になる左の手
雨の降る中を長柄へ行く車
辻占に今の心を見破られ
數を讀むやうに飛石傳ひなり
夜廻りに聲に轉た寢寒うなり
黄昏にビラを四五枚呉れるなり
肩籠へみかんの皮もほりこまれ
島の内おちよ様の顔を知つてゐる
母の無言に腕を組む父
諺の通りに今はなるものか
祭日の氣分提灯搖れてゐる
目藥の一滴二滴うまく落ち
何萬と貯めてなんにも趣味がなし
何を感じたか女房の出入帳
逢へばすぐ女は歸る歸るなり

同同山同同同同同同同同同同同同同同大
梨 阪

同同天同同同同同同同同同同同同同同聞
花路

捕縄に近づく主義の惨めなり
 ローマンス斯くて三人子が出来る
 物語りするに涙が邪魔さなり
 惚れたてお金がやれる柄でなし
 中に空に夢にそれぐ持つ青さ
 ローマンスの人さなりた女店員
 開店の當座さんく賣れてゐた
 兄さんは失戀僕は片思ひ
 懐しい父を湯槽の中に見る
 大根の白さが目立つそれも朝
 母に聞きたし貧乏でゐた頃を
 妹よ一輪挿しよ淋しかろ
 じきあれだから若いのに聞かされん
 手習をするより先引しておいで
 萬更でないを遊々世話をする
 手を逃けた六神丸を子に頼み
 醒め果てた頃の手紙はよそくし
 髪切つたその氣で居つて義理を欠き
 俺達も其の一人なり畏まり
 受持が違ひコーヒーだけで去に
 目のつけるこが違ふよ靡で生き
 酒飲みはもうこりくこ母さ娘さ
 無分別もう満州へ流れ込み
 三越や中座の話嫁の里
 さんざめきまだ宵であり宵であり

大同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
 阪島中戸
 冷同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
 笑聲案山子月

顔色はあゝも思はせこうもさせ
 唯一眼だけご今宵も行くご決め
 這入つて見たいピアノ鳴つてゐる
 人様はさう思うでせうご女言ふ
 死の一つ手前で笑ふ聲ご聲
 運命ご諦めつゝも帶をしめ
 一步步死を清らかに打ち眺め
 鳥屋の鳥殺されるのも知らずして
 諦めの心になつて吸ふバット
 下駄の鼻緒の地味になりゆくも妻
 煙草盆の火にもいらくする暑さ
 杯を笑ふて返す妻ごなり
 新聞屋二階の吐言輕ううけ
 驛を出て眞紅の夕陽ひよいご見る
 Aも死にBも倒れて四十なり
 女房にする氣もなくてよく通ひ
 くちばしが折れさうになる女の子
 附合ひにそれ位なら持合せ
 塗替いた橋へ新柄涼みに來
 妹へもうそのやうな事もき
 好いチャンスあすは休みご云ふ女
 僕は今ごうにでもなる心にて
 その前夜思ひ切つたる口もき
 解らない癖に女房口を添へ

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
 阪京
 同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
 大夢子
 同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
 史朗
 同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
 鮎美
 同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
 千代二

神同紀同大同京同神同大同根同同大同同高同同同大同
戸伊阪都戸阪室阪知阪

郊同無同憲同早同芳香子同黒ん坊同同吟同同靜同同濁同同同彩同
村心翠苗子坊柳雲水秋



雅幽の句

黒木 莢 豆

雅幽君の句について少し書いてみたいと思ふ。雅幽君の句は田園詩趣の横溢した句で、社會批判的傾向の句との二種に大別することが出来る。勿論この二つのものが渾然として一人の雅幽を成してゐる句もあるわけではあるが、この二つのものが判然と二筋にわかつてみえるのが、君の句を通讀しての特異な印象であつた。

私が君を知つたのは一昨年（大正十三年）の秋近い日であつたと思ふ。その頃私は六甲山に住んでゐて、そこから鳴尾の遅日莊へ遊びに行つてゐた。そこへ君がひよつこりやつて來て熱心な態度で川柳の話をして行つた。君はそのころすでに

脊の子が夕陽を浴びて落ちそうなる
從ふて行かねば犬の首締り
姉さんにまけずに生んでみちめなり

等の句を矢つづけに發表して、君の誌才を期待されかけた時だつたので、談話にも油がのつてゐた。主幹の「紙屑に氣のない屑屋はなしこみ」松雨の「豊年に俵の繩のしめ心地」等を非常に推賞してゐた彼であつた。その頃の君の句の傾向にも、前

者のすぶささ後者の詩趣を脱つたものが見えるのであつた。

方針を立替へ捨子するのなり
一齊にをせば倒れる柵なるに
手の平へのせて貰はるだけのこ
喰べるもの遠慮するなさいふ旦那
順調に育つてニキビだらけなり
愚痴きいてくれぬお客はいんでくれ
寢轉んでばかり破壊の夢ばかり
あかるみへ出てきて蚯蚓死んでゐる
あくまでもなんでも書いて讀ませるぞ
この寒さ絹の薄さを知つたかい
彼れはもう鼻木さゝれた牛のやう
結局は撲られ損なりけり

これらの句は一句々々貴い體驗からにじみ出た句である。これらの句を讀んでゐるに彼れの生活環境がはつきり出てくる。そこからは生きんために手に汗してゐる生々しい戦ひのあきが熱さなり血なりあるは反抗さなり皮肉になつてほさばしりであるのである。これらの句を濃く彩つて、プロレタリア詩人としての彼れの業績の一端をなしてゐるのである。

願調に育つてニキビだらけなり……なんこいふ痛快な皮肉であらう。句中の人物はダンス、音楽會、觀劇等に日もこれ足りぬ有様なのである。男は意氣なネクタイを上手に結ぶこゝを覺はるのである。絹の靴下をうがち、カンガルーの靴を履き、鹿皮の手袋をはめ、藤のステツキを振るスタイルを研究するのである。女は齒を白く磨き、唇に紅をさし、爪を光らせ、鏡に向つて秋波の褶古に餘念がない。惡い香水を匂はせて、白晝公然と異性を流る支度にいそしむのである。何の會何々の會がつくのである。艶のある唇、うるんだ眼が彼らの身上で、男がようて金持ちであればよいのである。彼らの座右の銘は、『氣がきいてゐる』といふ一語につきるのである。だから紅毛人に遠慮ばかりするのである。だからカラーがよれてゐるミ眉をひその、ネクタイが曲つてゐるミ笑ふのである。『豚は遊ばせてをくミ丸々ミ太るものだが、自分らは豚の眞似する暇がない』といふ氣遣いなのである。

一齊にをせば倒れる欄なるに……ミ信じてゐる彼れにも、喰はずには一日も生きてゆけぬといふ悲惨なる事實を前にして出る裏切り者のそれらを呪ふこゝは出来ないものである。十錢の金にも一人の命を失ふ場合が現存する世の中なのである。結局は撲られ損となりけりの結果を生むのは火を見るよりも明らか判るのであるが、亦しても浴衣一枚のよごれつくすまでの戦ひをはじめるのである。理論でなく本能の動きに従ふのである。

彼れはさうした世間を目のあたりみて手に汗をして働いてゐる男なのである。

さの一句をよんでも心して讀むこゝ。そこに社會の一面が強く生きてゐるのである。こゝが君の句の強味であらう。四疊半裡に社會をしめきつて書齋の机の上にひねくり出された書籍の垢のやうな句、針の先で腫物をつくやうな句ではないと思ふ。學者の學者振る、藝術家の藝術家振るのは股間の墨丸を忘れてゐるこゝなのである。生命に直面して生れ出たものにはその弊はないのである。彼の句はその意味に於て健康である。廣い世間の中に息づいてゐる句である。辭句の上の幼稚さ等もあるにはあるがそれは弄んだあまのこないこゝによつて救はれてゐるのである。事實上直面して生れた句の強味はなんこいつても否定することは出来ない。吾等の周圍でも雅幽と共に蘆穂、徹底郎等の句にはこの意味に於て特に根強いものを持つてゐるこゝを思はせられる。句の生れる境地ミ句を作る態度ミいふこゝは私らの常に考へてゐるこゝである。そのこゝはいづれ別の機會に書くこゝがあらうと思ふが、雅幽君の態度なごも私が尊敬してゐるうちの一人である。手に汗して食ふ!!それほご理想的な作句環境があらうか。

脊の子が夕日を浴びて落ちさうな
ついそこへ息子出てゆく春の宵
ランプの灯脊戸の籤まで届かして
ステツキミ子ミ取換る癖がつき
彼の山が霞むミ巢立ちするのです

面當のやうに熟柿が石へ落ち
痛さうに霜に踏んでるゴム草履
西の風昨日も今日もまだ明日も

これらの句には前の句さちがつて、あざやかに田園詩趣がう
たはれてゐる。詩人としての雅幽、空想家としての君がよくで
ゝゐる。そこにも君の恵まれた天分が光つてゐるではないか。
次に情の人としての彼れのやさしい半面、彼の川柳家としての
確固たる地盤をなす句を三抜き出して列記しやう。

亂雑の嬉しきものよ箸の音
こま廻すやうに俵を皆つかい
棚釣つてこれで我家さいふ氣分
不機嫌なわけは此頃馬が瘡
喧嘩する程に世帯が締つて来
狂人と呼ばれる人氣もつて居り
なるやうになるさうなる浪花節
御利益へ大きくうつる過去の罪
隅へもの突き込む癖を先ずなほせ

あ　る　日　蛭　子　省　二

粒々集

新參のラムプ掃除を見殺にする
早起の母に鐘詰されぬなり
夜の部をのこし神樂を通りぬけ
晝の廓の水屋にみつけれ

嫌はれてゐることは知らず喋舌つてゐる
アメリカの便り家主も待つてゐる
戀一つ守り通して日本に居
もう戀の疲れが出たか湯さめして
のんでのんでのみ明さうご無理を言ひ
つぶし値にやがてなるべき名馬なり
嬉しさは手紙の中にまた手紙
君の句には作つたさいふ感じがないう生れたさいふ感じがする
そこが君の恵まれた作家であることを證據だてゝゐると思ふ。
君は創作の醍醐味を知つてゐる人である。君は決して川柳から
足を洗へる人ではないと思ふ。たまく君が一時本誌を退いた
さいふこころを知つたが、しかし君の華やかな創作に再び接する
日も遠くはあるまいと思ふ。雅幽君よ早く歸つて来たまへ
そして君の未來に掲げられてゐる赫しい太陽をつかまうでは
ないか、千古に生きる一句を残さうではないか。
一九二六・七・七日(七夕の日)西宮の寓居にて

住 菖蒲園の句會

七月四日
午後一時

菖蒲園で川柳句會をやります。妙に雨が降りますが、菖蒲園の川柳會としてはそれがふさはしいのかも知れません。わざ／＼遠方から來て戴く人達には特にお氣の毒でなりません。雨中にも拘らず多數御出席下され頗る盛會裡に散會出來ました。謠上を以て厚く御禮申上げます。

(住吉支部にて双柳)

出席者 (路郎、松郎、馬行、入道、万よし、一路、かほろ、三平、文久、万緑、花月、飯山、ひろし、松雨、二柳子、多聞、双柳)

怪談(兼題) 路郎選

怪談にたま／＼月が出て終ひ入道
怪談へあすこの家の事かいな 二柳子
怪談の終り士分に取立てる 一路
怪談のもう口を出す者がなし 馬行
降つてゐる椽に人でなし猫でなし 松郎
出雲の話涼しう寢につき 眠聲

鉛湯を飯んで幽靈の話 同
怪談の上手時々黙るなり 萬よし
黴菌も信じ怪談も疑ばず 同
怪談の子は爺だけで育つなり かほろ
かきもちがしめり怪談終ひなり 同
怪談の後ろにせまる人の息 文久
怪談へあざけるやうな風になり 同
怪談の髪一筋ご灯ご 同
怪談の柳にポスト無がりけり 多聞
怪談に灯のほしい高座なり 同
怪談に樂屋の太鼓くたぶれる 同
(人)怪談のネタは女將が知居。 三平
(地)怪談に恥かしなから手 同
(天)怪談誰れが水汲む音をさせ 文久

小舟

菖蒲園小舟の先が見へる 丈け 萬緑
小舟から寝起きのやうな顔見 入道
伏せられだ小舟へ雨のたゞき。 ひろし
迷惑なものも積んでる小舟なり 多聞
小舟をつないで祭にあがつて居 二柳子

難

大漁を知らせに小舟戻つて來 三平
憎らしいやうに小舟を突いて。 同
燈臺の近く小舟の行く戻り 一路
嵐山小舟流れに逆はず 同
別莊の便り小舟が出來たこご 萬よし
小舟一艘へ月の隅なく 同
追分の稽古に小舟使はれる かほろ
運もう枯れて小舟に水が有り 同
田植笠晝飯に去ぬ舟を漕ぎ 飯山
誰も居ぬ小舟へさくらちりか。 同
まねいてる團扇小舟に涙をみせ 文久
足踏んだ小舟嬉しう揺れてゐる 同
百々之助丁度小舟を見つけ出し 馬行
小舟芒にかくれ芒の音をさせ 同
蔭さ日南の小舟一艘 松郎
曲る小舟に青葉がつく 同
養生が舟漕ぐこごも覺て來 路郎
又蟹を釣つては笑ふ舟の揺れ 同
完全に父さなつたる浴衣かけ 萬よし
高燈籠その灯は寒うみせ 文久
腹達ひその遺言をよく守り 一路
高燈籠舞妓の袖の長いこご 松雨
公園の夜更噴水だけが吹き ひろし

漫 畫

涼々清談

▲廢物利用

吉岡鳥平

『納涼素人淨瑠璃會』ミ云ものがある。赤い顔して黄な聲を出すデモ義太夫、さう考へて見ても納涼ミは面妖ミ出掛て見たら、戸障子を取拂つた大廣間に、客はほんのボツチリ、座敷は廣々して居るし、風通しはいゝし、成程、納涼なる説ミ三嘆した。



川柳書架

(十九)

青磁抄(東京川柳新屋會發行)

▲本講川柳桂馬第一句集である。その序の一節に「萬葉が、猿蓑が、或はわが柳多留が、生んだ詩人の數を想ふ。それは吾々に、句集を編む事が、如何に有意義で、それ以上必要であるかを教へ更に勇氣ミ感激ミを與へる」云と説いてゐる。

▲本句集は大正十四年度、新屋會發行「桂馬」に發表されました。諸家の創作數千句を専ら、本會同人、金光金一郎兩名が選擇を加へまして、其收錄二百八十餘句を以て形成されてあります。ミは其凡例の一つである。

▲本句集は大正十五年六月二十五日發行。四六半截版六七頁。定價五拾錢。發行所は東京市小石川區柳町二三川柳新屋會編輯人東京府下澁谷一八二古谷英、發行人東京市小石川區柳町二三田中金一郎

三面子 狂句集 (其二)

▲「せいふく御わらびくだされたく候三面子」之丈けが本書の序である。

▲明治三十八年一月八日發行。菊半截版七四頁。編輯兼發行者江草斧太郎。發行所は東京市神田區一ツ橋通町七番地三、四號地有斐閣書房。

▲三面子は法學博士岡田朝太郎先生の事である。狂句集ミあれミ、川柳

▲納涼會

夏になるに納涼會云うものが方々に開催される。行つて見ると、暑ッ苦しい狭い園内にゴタゴタ集まつた連中が、汗みぎろになつてウチャ／＼して居る。何の事はない、求めて汗を出さうとして居るやうなものだ。若し、人間の汗が一定量に限られ、その一定量を出し切つて仕舞うと、もうその後は汗が出ない云うのなら極めて有意義な催しだらうが：



集であることは勿論である。本書が發行された明治三十八年頃には今日の如く、川柳に狂句の文字をハツキリ句別して使用してゐなかつた。
▲本書は最近博士から寄贈をうけたものであるが、おそろく絶版であらうと思ふから四五句を拾つて見やう
令嬢 令嬢の琴も英語も孕む迄
華族 令夫人乳母に來て愚に
高襟 從五位様射的のビノ
海老茶 英吉利で育つて字が書
なかく面白句が多い。上部に示したのは題であるが當時の社會がよく窺はれるではないか
川柳の作り方改題

川柳作法

(木村半文錢著)

▲本書は代表句選に川柳の作り方の改題、改題、増補されたものである
▲川柳の二潮流、川柳の生活、新興川柳の内容の三項が増補され、その他は改題前のものさ少しも變つてゐないが川柳に熱心な人は本書を一讀する必要がある
▲本書は大正十五年六月十五日發行
▲從前の組のまゝ四六判型となる
▲四一七頁。定價一圓八十錢。發行所は大阪市東區備後町一丁目三番地湯川明文館。
▲定價が高くなつた體裁はすつとよくなつた。入門書としてはなかくいい本だ。

本社七月例会

七月三日午後七時
於日本橋俱樂部

路郎、番翁、番外、ひろし、莢豆、飯山、かほろ、双柳、万よし、遊二郎、山雨樓
青影子、三矢、琴香、枝呂、山月、花月、眠聲、突支坊、六花坊、招次、靜雲、一
醉、博久、助六、南枝、子行、柳一、清、彩秋、久郎、三笑、一路、馬行、刀三、
松郎、二柳子(出席名簿より)

資本金(兼題)

松郎選

資本金の隣りに住んで琴をき、
メーデーの朝資本金も齒を磨き
よく動く口を資本金眺めて居
汗を拭き、資本金の後へつき
資本金の頂きます手をば出し
資本金の眼に瘦犬の存在
資本金のよんごころなく子、眞
泣き言へ資本金ぐつ鼻をかみ
重役室へ通されヤー君か
資本金は自分名だけやつ書け
實地の心得あつて資本金手汚
うつごりごする資本金利廻り
警察に資本金心安い人
早稲田の其後を資本金に聞かれ
機械の音に安心をした資本金

双柳 飯山 月兎 番外 枝呂 英豆 かほろ 山雨樓 びろし 花月 一路 子行 一醉 刀三 同

こゝに惱む資本金ありき大學出
資本金を標的にして瘦せてゐる
朝顔が資本金の手を煩はし
廣重や歌麿なんごうんご持ち
葉巻一本に足らぬ人間働かし
板の間に寝たがこの頃金を貸し
妾には一言もない金を出し
(軸)資本金に招は發句詠ませ
醜男の蠅を捕るのに妙を得て
醜男は老へ方が違ふなり
こゝへ來ても醜男の恵まれず
唄の上手な醜男の持てる事
醜男が人の氣つかぬめかし方
醜男が三面記事を賑はせる
醜男のやうく出來た結の羽織

馬行 同 遊二郎 同 路郎 同 松郎 互選 遊二郎 英豆 一醉 突支坊 山笑 三次 かほろ

哀れさは醜男持てるやうに云ひ
意志強きものに醜男生れつき
金に恵まれて醜男の一生
醜男が飲んで慕れた自慢する
醜男は禮儀正しく歸るなり
醜男が小金を貯めて若うなり
醜男がすら／＼と讀み下し
言ひ出す醜男あさへひかぬ
醜男のせめて頭の毛を伸ばし
醜男で男の中の男なり
偉大な赤鼻で三品の大手筋
醜男に大事な金が減つて來る
醜男なりに四十へ屈き
散髪の工合醜男變てみる
恨みあるやうに醜男蚊を殺し
病院へ醜男逢ひに行く氣なり
醜男を出して女給は山を入れ
醜男の扇子一つで渡つて來
醜男の行くべき道を心得に
醜男ののろけをのろけとして
アトリエの醜男は今起きたこ
色淺黒くなご、醜男思つて居
醜男の帳つけこなつて歸りゆく
醜男の哀れ使はれ損になり

柳一行 子行 反柳 山月 二柳子 助六 博久 萬よし 靜雲 彩秋 ひろし 南枝 山雨樓 枝呂 青影子 飯山 同 馬行 同 刀三 同 路郎 同



文藝交友思出物語

駒井美の作

此頃文壇噂の聞書云つた様なものが流行る。私も一寸昔話の抜書云つた風なものを書いて見た。過去は霞一重にはつきりない處に面白味がある。現在云ふものは餘りに狭く明るすぎず。人は本當にそんな事も有りません云ふものに實際悠久な懐し味も湧いて来る。此頃の機に遊び事に税金を徴られる様になつては世間も行詰りだ。或人は云つたが、今より拾三四年前はまだまだ人が馬鹿々々しい事の尊さを知つてゐた。近年譯けて商業都市の大阪に來て一層此感を深くする事が多い。文中の人々も若し此配事を讀まれたら乾度追憶の微笑が浮ぶ事と思つてゐる。

中學時代には今の市川猿之助が學友で有つた。時々引眉等して登校して來た。或冬の歸り向島に雪投げに行つた事がある。三圍の境内の積雪に市川園子君は盛んにトンボを切つて見せて皆を驚かせた。そして歸り道に寒いから家に寄れ云ひ出した向ふに見へる大きな建物は何だらうと其後からついて行く一人が云つた。多分病院だらうと中に答へた者がある。我々より年配な同君は莞爾笑つた。其建物こそ吉原で其時分猿之助の宅は

澤柳樓云ふ其一軒で有つた。吉原特有の眺橋から中庭に這入る二階裏から妓共が此中學生徒を物珍らし氣に見降ろして居た。母堂から舊正月だ。御雜煮を御馳走に成つた時私の傍で聲色を遣つて見せた小さい弟が今の八百藏君に違ひない。日が暮る。同行のSが心配して僕に磨き上げた様な表々關の板の間をおづ／＼踏むで家へ電話をかけた。おツ母さん僕は今大變な處にゐます。冒頭Sの言葉は頗る滑稽だつた。何處にまあ怪我でもしたのかい。電話口の母親は非常に驚いたらしかつた。實は吉原にゐるのです。愕然たる母親も其譯がわかる。今度は純眞な子供心が反對に餘程可笑かつたかSの後に居た連中がこつこ吹出すと同時に受話機からも轉け出る様な笑ひが高く洩れた。猿之助君は在學中妻帯したが夫でも元氣に人取競走等をして遊んだ。奥さんを貰つて人取りなんかしても好いのかい。眞面目に肩をたいて聞いて其時分の僕は叱られた事がある。

東京で私の育つた家は所謂下町に親戚が多く例年其連中で一ツ處に避寒避暑が企てられた。馬喰町の師匠で通る長唄軒勝の家元のお磯さん云ふのは今の市川龜藏の細君で跡の家元をつぐ妹のお照君云ふのは其時代の下町娘として單獨突然與謝野晶子女史の門をたいて入門した云ふ變り者で有つた。

日本橋の富家天野氏の令嬢は後に森ほのほの夫人と成つた。名は文子、桔梗と號した。不幸にも早世をしたが其頃文壇で俗に仰の叔母さんと呼ばれた長谷川時雨女史が大正美人傳を執筆して故人の舞踊の妙と其の歌才を痛く惜んだ。

櫻なき散るはいさ好し花椿をこ落つるこそ悲しかりけれ
菅笠をいたく好みて姉の家を日頃訪ひにし我なりしかな
等の歌が有る。御主人のほのほ君は學生時代にはよく牛込の清風亭あたりでお道樂の芝居をした。其一座の立女形が川村花菱で花菱君の女形等は實に空前絶後想像して見ても振つたものである。

○

亡く成つた人の數のうち池田蕉園女史は私の姉の友達で有つた。蕉園さんは女史等云ふ堅苦しい字をつけ加へ度くない程誰にでも描く處の浮世畫の如く純日本的な女性で有つた。私の小さい弟が死んだ時にも棺前に白百合を捧けて心行く迄泣いて呉れた様な優しい婦人で有つた。須磨の春に夫君輝方氏一

處に拙宅を懇々訪ねて來た事が有るが其時紫紺地に櫻の吹雪を散らした美しい被布を着て來た。そして歿後供養の帛紗にも之を少しも變らない花吹雪が淋しく染め出されて泉鏡花が

普門品ひねもす雨の櫻かな

の一句がものされて配られた。故人は生前餘程櫻が好きで有つたらしく、又櫻の如く日本趣味な婦人で櫻の散る如く又亡くなつた人である。洋畫の故中川八郎畫伯は端嚴な好紳士の典型で畫架の旅の途次は屹度私の處に寄つた。或年のしかも大晦日神戶の某亭で二人限りの忘年會を開いて皆を驚かせた事がある。

來合せた一妓が其時中川氏に一寸問惚れをした様子だつた。流石の同氏も滿更悪い心持はしないさ見へて平素寡言な氏が自ら手を打ち一生一度のハットセを唄つた。此風聞が東京の新聞に誇大に載せられたには少々閉口したらしく、ハットセと共に謹嚴なる故中川八郎生前の艶聞の一つにされてゐた。氏は洋畫家にして性格趣味共に一面日本畫家の趣に近く畫風も又人の知る如く穩かなもので有つた。従つて骨董類にも眼識が高く兵庫の夜店の散歩に珍らしいお櫓下人形等をフツ見つけ出して來て呉れたりした。又そうかと思ふに宅中女中達が正月の餅を切つてゐるのを見て、私も一ツ手傳おふか美術的に切るよと帝展審査員が冗談に庖丁を手にして女中共を恐縮させたりした。楠山正雄、木下李太郎氏は其々越後の赤倉温泉に滞在してゐた。

李氏は本名を太田政雄實は皮膚科の醫學博士さんで有る。當時私の義兄も長野市でも醫者で有つた。或日現今の侍醫頭の入澤博士が李さんを訪ねて来て××も長野で病院が馬鹿に當つてね、偶然義兄の噂が出た。するに李さんは隣室の私の方を指さして其弟さんがいます云ふに澤さんが一寸喰つた様子が私にはお笑可かつた。私が東京に出掛けて行くに李さんは深川の宮川で鰻を御馳走して其頃はまだ珍らしい自動車に分をのせて北原白秋の宅へ遊びに連れて行つてくれたりした。

滞留中田山花袋さんも見へた。小きんさん云ふ寵妓も雛妓を連れて居られた。こんな事を書くのは或は如何共思ふが十數年の今日田山さんかもし此記事を讀まれたら今更に微笑を屹度されると思ふ。路を一處に歩んで行くに、君枯草の好い匂がしますね、いかにも田山さんらしい言葉も其時間かされた。楠山正雄君は名代の早口で感興にのるに小さな體を無闇にゆするものが癖で有る。其體の小兵を云はれるに直に怒つた。然し楠山氏が有名な翻譯家で有る事は誰も知つてゐるが、同君が今の東京には珍らしい先祖代々屹粹な江戸ツ子で有る事は餘り人は知らない。大正四年の一月私は京都に同君と再び同遊して時の才人伊庭孝にばつたり四條の橋の真中で出逢つた。見るに伊庭先生右手に一挺のピストルをしっかりと握つてゐる。少々嚇かされ氣味でおい物騒だぜ云ふにばら一幕目さきにこにこ笑つた。成

程考へて見るに其時の伊庭孝で南座シヨウのチョコレート兵隊を下山京子、玉村歌路の連中としてゐた。然し今ならばまごとしてゐるに兎器携帶令で兎も角一寸警察へ云ふ處かも知れない。米國に行つた水谷八重子は藝術座のアンナカレンナの子役が初役で神戸へ來た時小山内薫氏達からの添書で私は花園の花で自身花束を造つて贈つてやつたり等した。八重ちゃんやつに十二の頃で有つたらう。夫が此頃全く好い娘さんになつて先頃も道頓堀で不意に出逢つて二人立話をしてゐるに前後忽ちの人だかりで此伯父さんも些か全く驚いて仕舞つた。八重ちゃん兄さんの水谷竹紫君は昔中々柔道が強かつた。浮か浮か色の生白い狼フアンとやらの連中はひねられない様御用心一寸笑つて嚇かして置く。(つづく)

▲八月の柳談會は休會

暑さのみぎりでもあり、納涼川柳會の準備もあり八月の柳談會は休みます。若しやれば六甲山あたりへ天幕を張つて徹夜でやります。その時には從來の出席者へは案内いたします。其の他、會で希望者は豫め、本社まで傳へて置て下さい。(柳談會幹事)

遠近太與里

▲浅井五葉氏より

御病氣の退歸上にて拜見仕候。霖雨不順の折柄御攝養專一に奉祈上候。半君の「忘れぬことども」興味多く讀み申候。小生不相變いつもの通に相慕し申居候。大病にもならずう剛健にもならず體量依然十二貫の處に有之候。

男風呂

みな

十四貫

以上也

漢やましく斯様に相眺め申居候。

難歸乍毎度難有頂戴仕居候。戸村老御令聞へ宜敷御傳聲願上候。早々

▲西田當百氏より

半子の思ひ出の記一氣に讀みました。悉く思ひ當ることイヤ中には未知の事も多く故郷に歸省して舊知に會談するの感あり。老生も思ひ出の記を書くべき年となりたるか。淋しい心持も湧きます。併し此文を讀んで別種の痛い感じを得た。それは半子のあの冒頭の「一節悲痛なる一節を讀んで」舊友は随分その氣の毒さを感じてゐることであらう。老生など雨風の潤ふを覺けた。何ヶ月かはぬか一寸覺はぬが久しく訪問せぬので近頃は更に「苦み弱りつゝあるのではないかと想像する。それにつけても大兄の身體は無理なしな

い様に「お座なりを言つても駄目だが責任上矢張り大事にして下さい。老生無事病妻辛うじて生存

▲吉岡鳥平氏より

拜啓謹辭嬉しく拜見有難御禮申上ます。御病氣の由も御全快のことと思ひます。が御見舞申上ます。

暫く御目にかゝりませんが何か魂の踊るやうなお話はありませんか。野球の歸りに御邪魔致したいと思つて居ます。

表紙が變りましたね。また御用とあれば何時でも描きます。御遠慮なく仰有つて下さい。野球チームを作りました。

D 竹下彌二郎(新内の太夫)

C 小久保(大朝社員)

SS 中村長(運動翻譯家)

IB 吉岡

IIB 馬場蹄二

IIB 高井三郎(大朝記者)

RF 正岡啓

CF 下條忠男(中央運動社)

LF 桂三木男(落語)

SUB 千早晶子(松竹樂劇部)

SUB 東條かほる(女流琵琶)

三木星花(女流琵琶)

食満南北

カントク三遊亭圓馬

桂三木助

あなたの雜誌にもやる人が居られるでせうから、如何ですゲームでもやりませんか。刺撃になることなら何でもやりたい。さ思うので

す、以上で弱いこと受合のチームです。拜眉の上ゆるゆる申ます。先は一寸お見舞まで。早々

▲駒井美の作氏より

随分毎日暑い。車健康は如何。岳友會で明日から立山行の先達を移め候。頂上には積雪五尺さの事。嘘の様に候。月末には歸へります。(すべて路郎宛)

の元中中馬

はに管贈御

シロシホリ

ルービヒサア

美麗なる化粧箱あり

募

集

句

牛

塚崎松郎選

牛曳いて夕立雲を遠く見る
急がしいやうにもみゐる牛車
牛さんだんく遠く暮れてゆく
まだ一里行かねばならぬ牛で
たゝかれた事を忘れて牛は喰ひ
ぬかるみをべたりく牛の足
牽き牽る牛に轡の悲しい音
ラヂオ劇牛が鳴く音で初められ
牛と共に年寄る父へすまない氣
はつきり牛の鼻息見へてゐる
母と牛残して今日を入營し
牛の眼に自動車來おごなしさ
牛を洗ふて父になりますまし
牛の脊中に平和な夕日
友達も持たず一日牛を追ひ
牧の牛起上つたが用もなし
牛が通る道を開いて草をつみ
頼山陽寝足らぬ窓に牛を見る
牛の角筈の皮劔いたやう

天 花
呂 久
龍 曉
香 琴
路 聞
水 濁
天 拔
美 鮎
坊 手
郎 正
樓 山
萬 雨
よし 山
眠 雨
聲 樓
案 山
子 子
一 文
字 字
山 山
月 月
太 閣
郎 郎

畑にもあらず牛小屋廣く取り
果かなさ神戶に著いてからの牛
のつそり牛自動車まごつ
牛車すてゝるやうに土手の下
親牛に近く仔牛のまめな事
牛車の後の自動車仕方なく
長閑さは食ふてゐる牛に寝てゐる牛
心もさなく長男は牛を追ひ
世渡りに牛から習ふ事一つ
橋へ來て牛のよだれは軽う散り
ぢつとする牛も思案があるらしい
御所車牛拍手の中を電き
遠足は畑を踏んで牛を避け
止つたと思ふと動く牛の口
牛と牛川をへだてゝ吼いてゐる
ついで行く仔牛の足の早いこと
哲人のごごく大牛おしだまり
牛さむぐゝ水を渡るさざなみ
街道の牛を避けたる砂埃り

憲 柳
翠 也
汀 柳
白 柳
郊 村
突 支
史 期
干 鳥
光 路
大 夢
子 子
三 次
柳 秀
の ぼ
飯 山
同 春
同 三

川柳家の戸籍調べ

□ 係 馬 行 生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所
(五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八)
好きなタイプの人 (九) 自信の句 (一〇) 川
柳以外の趣味 (一一) 相遇者の有無 (一二) 嫌
ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

(93) 渡邊 虹衣

(一) 渡邊源三 (二) 虹衣 (三) 煙霞堂 (四) 大
阪市天王寺區上之宮町六十一番地 (五) 明
治十七年三月廿六日生 (六) 株式會社大阪
時事新報社社會部長兼學藝部長 (七) 是は
澤山ありますが以下その内から少し記し
ます「戀さいふ正味のさこはつまむ程」
「もてぬ髪結床を代へて見る」心中の
追手に想の許し文「證文で貸さぬ金でも
文で貸し」綻びを縫ふうち習間土俵入り
「身の上」にふさ氣がついて夜が長し「本
降りになつて出て行て雨宿り」あき店へ
一聲する納豆賣「分散にうつかりと咲
く冬牡丹」腹を切る事も教へて可愛がり
「うれしさを取りかへさるゝ鐘の聲」こ
の外コダ「澤山あります以上の句は只
今胸に浮んだのを記しただけです」(八) 和
洋装さくらでも、姿のよい、髪黒くて
房々とした、眼の大きい女で話なさず

牛の咽喉かすかに動き盡に入る
干菜からの風牛の脊を吹く
牛のいたづら善人へ角を振り
袂纏るを牛嗅ぐやうにする
粟栗の明るさに牛の顔出る
(佳)牛を追ひつゝ言傳てを云々
(佳)牛の影長うに曳き暮れて
(佳)叔父さん相談を牛を賣
飯残無同
山紅心三

青春

◇ 刀三選

代数に青春の血が欠伸する
青春の或日巴里の夢をみる
醜男は青春を諦めてゐる
青春の目先きばかりが物足らず
一杯の水を呑むにも著きあり
青春の些細な事に恥を掻き
青春の血潮に燃ゆる雨傘
青春を人間並にみてくれず
青春は親を捨てやうかと思ひ
心臓が高鳴るなごまだ若し
寶塚若い男へ幕が明き
青春の此處にも知つた女が居
青春を勵ましてゐる許嫁
青春に理想の妻が見當らず
ヴェニス氣で青春は橋に立ち
青春を工場の隅へ捨てに来る
彼女彼女書き疲れる
松同悟同柳同史同聞同久同濱同白同鮎同美同翠同江
郎郎秀朗路郎呂波灣

(人)しみじみ牛の匂に草刈る
(人)大牛にさびしき日鐘鳴る
(地)炎天に出し切つて牛の舌
(天)賣られた牛の門を出て行く
(軸)牛を賣金元手に後家立
参考
朝霧の中から牛の顔が出る 故六厘坊
生上 刀三共選
生上 刀三共選

些のわが風呂敷に書き
戀の三越家根ばかりなる
青春にもう一生の底が見
(佳)青春の氣焔を前に聳こなり
(佳)眞つ晝間青春の身に恥多き
(佳)立志傳皆青春を無駄にせず
(佳)戀すれば金少しは欲しく
(佳)青春果敢に寝カカルモチン
(佳)青春をはつきり罷れて
(佳)片頬を染めて失禮して飯り
(佳)敷布は白く十七の秋
(佳)Gペンの先若き消ゆゆ
(佳)若き嬉しく朝の改札
(佳)青春を今は息子に見るば
(佳)若きたのみに今日を生き
(選後)に誰でも一邊は味はつた事のある青春
若しくは今正に味ひつゝある青春
戀の三越家根ばかりなる
青春にもう一生の底が見
(佳)青春の氣焔を前に聳こなり
(佳)眞つ晝間青春の身に恥多き
(佳)立志傳皆青春を無駄にせず
(佳)戀すれば金少しは欲しく
(佳)青春果敢に寝カカルモチン
(佳)青春をはつきり罷れて
(佳)片頬を染めて失禮して飯り
(佳)敷布は白く十七の秋
(佳)Gペンの先若き消ゆゆ
(佳)若き嬉しく朝の改札
(佳)青春を今は息子に見るば
(佳)若きたのみに今日を生き
(選後)に誰でも一邊は味はつた事のある青春
若しくは今正に味ひつゝある青春

時には袖で軟らかなシナをつくり言葉のはつきりとした者(九)マダ(これか云ふ程自信のある句は能きません(一〇)茶事・新古美術の研究・音楽・芝居・小唄(聴く事)讀書(何でも手當り次第に讀む(一一)有(一二)責任觀念のない人、つけ上る人、大言壯語をする人、女の酔つ拂ひ、女の厚化粧、勝負事、蛇、地震(二三)明治三十八年久良岐社で五月鯉の編輯にあづかつた時。

(94) 中山 青葉冠

(一)中山次郎(二)青葉冠(あをばかん)
(三)天鹿兆人(四)東京日本橋區大馬路
二の三一(五)明治二十九年一月九日生
(六)商店員(七)好きな句餘り多し(八)女
らしい女(九)作句全部に自信を有す(一
〇)登山、讀書(一一)有(一二)食物(辛
茄子、さうなす)其他野菜類に多し、見
る物(日本物の映畫)聴くもの(浪花節)
(一三)大正十年十月。

(95) 福田 山雨樓

(一)福田義彦(二)山雨樓(三)滴水(俳句)
戲多通(四)大阪府中河内郡龍華村大字安
中四一六(五)明治三十九年十月一日生
(六)神戸鐵道局湯町保線事務所事務員
(七)立退きに六法全書くつて見る(慰め
に來て呉れたのか夜の蠅)夢の芽の青さ
の中の法隆寺(借りる氣で行けば有馬の

必ずや佳句の生れる事さひそかに期待してゐたのが間違ひでした「人」さか「花」さかで作句するさ同じ程度の漠然さが「青春」に充分あるからでせう。可なり澤山の集句にチェックを進めてゐつた私は暗然としてペンを投げたので有ます(刀三生)

◇ 夢乃選

青春の戀に破れた國を立ち 冷笑
青春を厚司 著てゐて 物足らず 閑路
青春の二人此頃道を避け 濁水
青春を想ひ出させるあそびぶり 鮎美
孟おさり若い同志が夜をふかし 眠聲
青春を忘れた様に後家を立て 案山子
人並に惱みをもつて二十才すぎ 一文字
青春になつて 挫けた無妻主義 志郎
青春の心地四十にまださめず 笛呂
青春は惱みの中に過ぎ去つて 千鳥
青春は白髪を描いて消失せる 光路
思ひ出の縁の岡に家が立ち 義郎
青春を黒うやけてる女子選手 殘紅
青春の曲線ピチミ張りさける 隨帖
飲んだ時だけ青春の意氣があり 大夢千
青春はコーヒの香り知り初めて 三次
青春の成る日巴里の夢を見る 憲翠

辯士

高橋 馬行 共選

青春へ父の意見の冷た過ぎ 無心
ユニホーム 青春の胸高鳴る日 皓半
青春の二人は後も考へず 郊村
青春の血で張り切つた様な乳 柳也
青春をあざむいた戀ばかりして 史朗
十八九大阪の夢京の夢 天花
青春は死ぬる生くるが多過ぎる 清
青春は理想通りに成るさ決め 柳秀
青春は釋迦を偽善にしてしまひ 万よし
青春の眼は空にあこがれ 山雨樓
日記を焼いて自殺ささまる 馬行
咲く春をこの青年の藥瓶 万よし
敷布は白く十七の秋 松郎
紫の我風呂敷にささ書き 同
青春の姉はさびしい人さなり 悟郎
青春の悲哀去年の洋傘をさし のはる
球撞いて女に逢へば今日も無事 馬行
地
一つばいの水を飲むにも若さ。 溜波生
わが頭したゝかぶつて 年若し 万よし
天
彼女彼女さ書いて疲れぬ 松郎

夏に聞く「大阪に住むうれしさの繪看板」
「剃刀をやつても赤子握るだらう」澤山
ある中で馬鹿に氣に入つて居る現代の愛
謡吟の一つです(ハ)菊池幽芳氏の「小夜
子」に出る「照代」の様なバツシブな感
じを與へる女性(九)「寢ころぶさ只寢こ
ろんだだけの智恵」寢惚けたを可愛いも
のに親が見る(一〇)俳句、謡曲、庭球、
團扇、文藝(一一)有子供は六つになる男
の子一人(一二)女見たいな男、男見たい
な女(併發は此限りに非ず)(一四)大正十
四年一月頃から句會は同年の川柳雜誌十
一月例會が初めてです

(96) 田中ひで一

(一)田中英一(二)ひで一(三)緋灯樓(四)
神戸市北長湊通三丁目一三〇(五)明治四
十年九月十五日生(六)海運小僧(七)紋太
はんの句に多し(八)上品で愛嬌のあるあ
つさりした女(九)無(一〇)讀書・音楽、
映畫(一一)無(一二)おつちよちこよい
(一三)大正十三年九月頃神戸柳屋「損」へ
投句柳誌としては大正川柳一五一號へ緋
灯の名で載つたのが初めて。

(97) 中野花坊

(一)中野欽司(二)秀花坊(三)なし(四)東
京市小石川區白山前町六二高橋内(五)明
治廿九年一月廿四日(六)呉服店員(七)うる
ほひのある句(八)垢抜けのした世話女房
式(九)まだ出たてのほやくできて

かほる選

其映畫だん／＼辯士の顔見へ
窓開いた辯ぎに辯士水を飲み
暗りの中に辯士は見得を切り
旗の日に辯士説明ちこはぶき
夜部辯士シツプがかわききり
辯士ふし時計を見れば止つてゐ
堂々に辯士は變な聲を出し
説明がこざれて辯士寒うなり
滑稽は緋の着物着た辯士
辯までが傳へられて来る辯士
大和路は辯士も技士も一人宛
停電は辯士の洒落に笑ひ聲
部動の辯士に惜しひ男前
活動の歸り辯士の聲になり
花形の辯士に小供手をたゝき
キツス等見ずにさつさ辯士人
（軸活辯で憎舞臺が踏めるなり）

馬行
選
聞路
天魂
眞沙哉
万よし
柳一
突坊
利劍坊
山月

眠聲
夢坊
突支坊
琴香
史朗
憲朗
山雨樓
聞路
千代二
万よし
同
柳秀
同
逸錢
同
かほる

(佳)説明が途切、辯士寒うなり
山雨樓

阪妻の素顔を、辯士まだ知らず
其象

喝采のやむまで、辯士汗を拭き
夢坊

横文字になる、辯士の方を見る
同

井を通して、辯士舞臺へ出
拔天

應援の辯士肩書ありつたけ
同

旗の日を、辯士説明もさばぶき
琴香

演壇に立たぬ、辯士名も迷ね
同

満場の諸君に欠伸さす、辯士
殘紅

邦文の字幕、辯士も讀めるらし
同

見くびつた、辯士案内喋べつて居
憲翠

咳一つ聞かず、辯士いゝ氣持
同

辯士ふと時計を見る、止つてる
同

畫面一變すれば、辯士は聲を替へ
眠聲

辯士また招待券をやつて去に
同

その辯士今カフエを出たぞ
同

(佳)歩いてるらしい、辯士の聲ぞ知
史朗

辯士今特急で來た事を云ひ
同

ネクタイの色に、辯士の主義を知
同

辯士まだ在學中、云ふ姿
同

英語ふと、辯士の口を流れ出る
逸錢

あつさり、辯士は髪を片つける
同

いそがしい、辯士へ書面また變り
同

(佳)キツスなに見えさつ、辯士入
同

もまごまつた句なんかありませんよろしく御指導を願ひます(二〇) 謠、(まだ四五冊位) 芝居、酒、日本の音楽(但し聞く方)(二一) 目下搜索中找れさ思はん方はお名乗りを(二三) 西洋がぶれのした女ネチ／＼した男、酒を飲まない人、話せない人(二三) 大正拾四年八月頃から。

(98) 牧田憲翠

(一)牧田隆誠(二)憲宰(三)普門なきと書く事もあります(四)大阪市南區心齋橋筋二丁目多田商店方(五)明治三十四年四月十日生(六)貴金鰯小間物(七)先生方の句を拜見しますと澤山ありますから列舉する事が出来ません(八)從順にして體格のよい理性に目醒めた女(九)「狂人へ生あるたかたか春さなり」湯治場で見ると焼は淋しすぎ」普請場の書癡一人起き二々起き「玩具箱擴けたまま晝寝の子」産み月に産婆の家を見て通り「お通夜から明るい町の廻り道」(一〇)下手な碁と文交渉中(一一)虚偽(一二)二年餘になります。

戸籍調べ募集

▼川柳家戸籍調べは益々盛んで多大の歡迎を受けてゐます。奮つて御投稿を祈ります。字數二百字内外、直接僕宛御送稿賜はらば好都合です(馬行生)



古句の糟粕

るびすせい二一

▲猿、三、犬

上品なあくたい弓で岩へかき異國まで女軍で武威を輝かし犬の齒はたたぬ岩根の御寢筆犬さかく文字も清水も弓の徳

朝鮮のこを神功皇后が「犬」さ仰せられた句である。他にも關係があるから少し長いが本朝神社考からぬく。

神功皇后三韓を伐んとして、諸神を鹿島にあつめて之を謀る。諸神悉く來り會す。阿度目の磯良獨り不到らず、諸神之れを怪むで庭燎を燃き青白の和幣を櫛の枝にかけ神樂を奏す、是に於て磯良出で来る、其の貌常に非ず。細螺石華及び諸々の藻繚其の身に附く、諸神其故を問ふ磯良答て曰く我れ滄海に入り群隣さ難居

して已に年久し、故に此の醜形を以て諸神に見え奉る、甚た心に愧つさ雖も神樂の至感に耐えず今神遊の庭に來れりさ皇后磯良に勅して干珠滿珠を龍宮に乞はしむ、龍宮乃ち兩珠を獻す、皇后是に於て黃石公一卷の書龍神兩顆の珠を以て三韓に發向し玉ふ、時に皇后産胎して已に五月鎧台はず、高良の明神初めて巧を運らして胎立を造つて之れを獻す、諏訪の明神住吉の明神共に將軍さ爲る、大船海に浮ぶ、三韓の兵糧船を發して海上に拒ぐ、時に皇后干珠を投じたまふに潮退いて陸なる、三韓の士卒船より下つて相戦ふ、皇后又滿珠を投じたまふに潮忽ち

に來る、潮死せる者數を知らず、三韓土我が神兵の拒く可らざるを見て遂に降つて罪を乞ふ。皇后三韓に入つて弓の彈を以て石上に書いて曰く、三韓の王は日本國の大なりさ、爾來新麗濟高麗毎年八十船の調物を貢す、皇后凱旋したまふ時に皇子を産び、是れ譽田の帝なり、帝常に黃石公の書を秘して未だ曾て人に授けず、崩する時に及んで遂に此の書を飲んで世に傳へず云ふ」

三韓の犬も猿には尾をはさみ我朝の猿三韓の犬を改め

「猿」は猿面冠者「三韓の犬」は前記の如し。

然るに朝鮮では秀吉の顔を評して「犬の如し」と言つて居る。犬猿宮ならず言ふ言葉もある、一人の面が猿さ見れ犬さみわるのは面白、朝鮮で「犬」さいふ意味はあまり感心した事でない、太閤も内外浮ばれぬ。

さる大名が予の顔が猿に似たさ人みな云

(附記) 柳雨翁が名古屋の書店から川柳参尾志を出版される事になつて、畏友桂雨氏が後援されて居る。本稿の一部は其の書に重復の恐れあれど投ずる事にした。同書は一名川柳戦國史と稱し其の校正刷十枚許り拜見したが、家庭の好讀み物である。

一日太閤が曾呂利に何にか望みがあらば聞入れてつかはすこの事に、然らば殿下のお耳を日に一度だけでよろしいから嗅がさせて頂き度う御座います、いこやすい事だ、夫れからは諸侯が伺候した際には、曾呂利が太閤の耳をかぐので、諸侯は自分等のことを何にか告げ口するの

一説に因るに井上新左衛門の奇行奇才が
 混同して會出利の名譽となつたにしも言ふ
 松平信綱執政の時、大名より獻じた鎧に
 塵が附いてゐたに言ふので不機嫌であつ
 たのを、井上が元來鎧には塵は附物で御
 座らう、三番叟にちりやたらり申すこ
 とも御座ればさ、大笑ひになつて濟びだ
 そろり詠んで名の高い松の歌

爰に於て大に感じ喜び給ひしこそ』

難問も韃靼そろりさぬける才(狂)
 そろり話さやつくにおん笑ひ(狂)
 駄洒落會呂利だから、川柳もドレもコレ
 も狂句許りで掲げるに躊躇する。會呂利
 病重くなつて、望みあらば何んなりと申
 せこの御こに御威勢で
 三千世界手に入らば極樂浄土われに
 給はれ

がある。此古句は僧正遍昭の『名にめで

てをれるばかりぞ女郎花、我落ちにきこ
人に語るな』から、生れたのであるが、
語るなと詠むでも馬子が皆しやべり
では樂屋落になつてしまふ。

にか口づさむもので、其の例は少くない
 アノ名古屋の日蓮寺（お釋迦様の骨のあ
 る）の初代で、世渡り上手の默仙大和尚
 明治四十年日露の古戦場供養に出掛け、
 孔子廟の前でおあつらい向きに馬がはね
 て落ちた。

ひよつとしたはづみに落ちて頭打つ
 坊主ならこそ傷（毛）がなかりけり
 ぞやつたさうだ（鎌胆術記載）所が、鎌
 倉の誠拙和尚が羅漢堂から落ちた時に、
 そばにゐた蜀山人が、
 羅漢から落ちて頭を佛菩薩
 ぞ即吟したら和尚は、

坊主頭に怪我（毛）がなかりけり
 ぞ附けてゐる。默仙大和尚ドウヂヤ、呵
 々。
 僧正は歌で黒歌なでるなり
 は『たらちねのかかれましてしもうば玉の
 我黒髪をなでおやりけん』が、背景を
 なしてゐる（六月十八日記）

愛讀者、寄稿家、
 同人諸氏の健康を
 祈つてゐます。

川柳雜誌は諸氏の
 御後援で益々發展
 いたしてまゐりま
 した事を感謝いた
 して居ります。

謹白

暑中

御伺

阪神沿線鳴尾

川柳雜誌社

同 麻生路郎
 同 葭乃



川柳塔

○

林田馬行

親に敗けて今宵となりし金屏風
妥協々々女房貰つた兒が出来た
醫者の眼にはつきり死んで行くが見ゆ
腹の減る前には主義もなかりける
さて誰を訪ねてやらうビールの泡
雀 囀れ ぎ 疲れた 俺だ
大股の前途かゞやく白スボン
西瓜を食つて打あけられぬ
鹿馬になつてお呉れご母さま妻が云ふ
夕陽 眞つ 赤だ 兒を探す

淀川の夕陽が女房への土産
赤貧の部屋へも朝日有難し
君らしき僕らしき十年経ちぬ
呼鈴で女房呼ぶ程金が出来
「不同調」「文藝春秋」二階留守
麥藁で戀も若さも吸つてやる
「或日彼女は」なごご戀にするなり
資本百借金百の合ひを行き
解決がつかなくなるご母を訪ひ
妬いた事を悔いてゐる寢息
喉佛動かばかりで死に切れず

夕立に下駄浮く家の亭主病む
義兄さんの足がおかしなまこへ來てゐる
寢轉へば腰の一線宙にあり
ダダイズムなご迷惑かけに來る
結婚一年隙をこさねて見たりする
洋服で原稿稼ぎの邪魔に來る

○ 黒木 莢 豆

雲の峯釋迦の偉業のおそろし
雲の峯おたまじやくしの尾がされる
才人に逢ねばこのごろいそがしく
飯の白きをうつむいて喰ふ
麥飯になじむ笑ひを中にして
こまごま姉のたよりのはつたいこ
傳説のさびしきものに天の川
大聲で談す友をば一人もち

○ 高橋 かほる

惚れられて又すみいろを見てもらひ
めねせんの單衣で板場いろに逢ひ
五重の塔一階づゝに違ふ風
その浴衣晝も着られる柄を撰り
みつ豆を食べく 翡翠買ふ話

○ 庄 万よし

走馬燈を父が灯して宵宮なり
工場着の製圖鹿爪らしく見る

○ 西垣 松雨

首提けたやうに早乙女苗を持ち
早乙女の一人は左ぎつちよにて
肴屋が無難作にはく長い靴
鎗はさびても親爺なかなか頑固なり

○ 喜田 飯山

丸善へいても無いのであきらめる
浴衣きて夕餉のおそい路次を抜け
商賣をうちあけるほご深うなり
筆算の答の方を待つてゐる
同僚の椅子まで退けて探して居
居候兩手に子供つれて出る
うなづいてやれば左遷の笑ひたり
その親へ先生ありのまゝを云ひ
月末を妾宅で寝るほごになり
思ひ出したやうに旦那は歸へるなり

○ 塚崎 松郎

打ちさけてしつぽく臺に肘をつき
恩に被てお臺所を引受ける
父の墓暑いぐらるはなんです
手紙で見ればきつい催促
心ではすまない嘘を信じられ

風鈴の下に債務者債權者
きざみを喫へに息子カラ／＼笑ふなり
後家立て、五年たらしの輪を替へる
負惜み念を押されて腹を立て
人間の灰を祭つて泣いてゐる
大掃除頼んでおいて神さ出る
父の肩もんで風鈴きいてゐる
ハンカチをたゝんで智恵が出ましたか
腹立てたあさのさびしさ水を飲み
停電や豈金力を如何せん
時計を巻いて風呂の留守する
うまいこゝ行つたさ印を一つ押し
ひがんだ子いつも女の子遊び
資本家よわしの家族は米を喰ふ
吸取紙ちと賑やかにしておくれ
腹立てゝはいたつばきが石になり
靴を履けお前の運がそこへ行く
厄年がなんださかだちしてみせる
絹糸さ小ぎれをためて死んでゆき
母の愚痴自分が死ねばよかつたさ
御詠歌にふさん敷くさは何事ぞ
妥協性ばかり夜伽に寄つてゐる
揚花火悲劇の下をはからず

○

松本助六

妓生の臙に嘘は見へざりし
妓生の彩衣若葉へ光るなり
洗濯の鮮女の一人手が疲れ
帆柱の旗かたむきてジャンク居る
鳥籠のいづれも無事に鳴いてゐる
酔ふてゐるのをおしまれる才があり
朝の蚊張流れ出すかと思はれる
ひきがへるさうれさ云つた歩きぶり
ボブラの葉風に一揆を起すやう
鬼灯さ見しは束の間の金魚
ひさまづは大きく見せて金魚浮き
失戀の赤いトマトをじつさ見る
女の後へついて出口のはかざらず
ハンカチを妻は少さく折つて呉れ
犬の事で揉めてる程の暮しむき
不景氣な事は知らずに學習院
停電にハッキリ見へる螢籠
編物へ蚊取線香の位置を變へ
張子の虎にも思ひがあるらしい
面倒が表情に出て印を押さ
結構な上へ結構な事續く
企てに父は驚くまい事か

矢田右大臣

乃

路

子

ビールの泡

森 東 魚

■路郎氏の「お元日」私の元日
此の頃やつこ小閑を得たので手當り次第に色々なものを讀んでみた、其中ふみ川柳みやこ二號の創作合評に劈頭路郎氏のお元日の句が問題になつてゐるのに興味を覺えた。雀郎君が第一に生活の報告としては頂けるけれど、ただそれだけで川柳誌としての藝術化がなはないか……と評してゐる。其他諸氏の説がそれ／＼路郎氏の心持を理解して申述べられてあるが要するに充分な共鳴はなかつたらしい。それは大勢の子供を家庭に持たない人達が多いからではないかしら私は思つた。
私の様な（路郎氏にはかなはないが）三人もの男の子に慰められたり惱まされたりしてゐる者には直ちに共鳴する事が出来る。殊に長男一人の時分の初

春のある俳句會で
新年の心しみ／＼兒を抱じり
ミ云ふ句を發表し、更に三人の子持ちになつた今年の春
一人一人元日の我が兒抱きやりぬ
ミ云ふ句を平氣で發表した私には、全く路郎氏の「お元日」の句に無條件で共鳴が出来たのであつた。私は同じやうな句を二度發表しながら其處に自ら心持ちの違ひが自分には明かに現はし得たやうに思つたのであつた。其處にゐた一人の俳人は「抱きやりぬ」ミ云ふやうな現はし方がまづいミ云ふ非難をした、私は不平であつた「抱きやりぬ」なきでは私は心持が現はしきれない、色々考へた末、さうしても「抱きやりぬ」になつたのである。他の一俳人は、不斷いそがしい、しみ／＼兒共達にも親しめない人の心持がよく受取れるミ云つてくれた。私は嬉しかつた。路郎氏の句にしてみても、假令

同氏の生活を知らないにしても「ごの子も／＼」ミ云ふ表現で子福者である主人公の境涯が受取れるし「息災でお元日」ミ云ふ措字に、和やかな新春を感謝してゐる良き父の心持を共鳴する事が出来る、ゆたかな新春の心持が描きだされてある處に立派に詩は存するミ私は思ふ。路郎氏の多くの句の中で「之以上には瘦せられぬ瘦せられぬ」（ほのかなユーモアを感じて）の句ミ共に私の好きな句である事を敢て申し度い。
■句の自信ミ云ふ事
戸籍調べの一項に自信の句ミ云ふのがあるが誰れもが大抵未だ殘念だがないなきミ誓いて居られるのを見うける。ある意味合から云つたらそれが信實であり、ある見方から云つたら單に卑下であるやうに思はれる。私は思ふに、ほんこの初心者でない限り、自分の句を雑誌に發表する場合は恐らく誰しも

が、相當な自信を持たない物はなからうと思ふ、さうして何月か何年かたつた後に、それ以上の或は同じ境地を詠んだ古句なきにぶつかつて少からず自信を失つたりする事が間々あるやうである、又それ反對に他の人に類句を見出して多少でも自分の方が立ち勝つてゐるやうに思はれて大變自信を強める事もある。私が曾て

似てゐる云ふ前提で口説くなり
を川柳詩に發表した事があつたが、
見申したやうださ遣手飲んでさし
見申したやうでさんすき首尾の
云ふ古句に出逢つて少からず恐入つた。
みの作君が

朝寐坊 三角なりの蚊帳に起き
の作はかなり自分でも好きな句であつたやうに思ふが

三角な蚊帳に敷入り朝寝をし
云ふ句が明和二年の萬句合せにある事を知つたら自選句集から抹殺したくなりはいまいか考へられる。又これに反對に、矢張り川柳みやこの合評で問題になつた水府君の

出戻りの路次に長々シンシ張りの句を見て私は、同じ様な心地を咏んだ、私自身の

シンシに夜の長い出戻りに寧ろ自信を強め得た（水府氏には甚だ失禮な云ひ條であるが）やうな氣がした。又きやりの鯛坊氏の句に、通學の朝々友の足揃ひを見て、私の嘗て發表した

直ぐ又足の揃ふ通學のある事を鯛坊氏に申送つた、朝々といふ所に鯛氏の方が或は深みがあるかと思つたが、私自身の句が必ずしも劣つてゐない云ふ自信は持つてゐたへ寧ろ自慙かも知れない。此の事を鯛氏は快く聞いて呉れた。同じ場面に感興を覺けた事を喜んでくれた。之も私が自作に自信を強めた一例である。又夜叉郎君に對しては屢私は自信を失ふ事がある、嘗て本誌に發表したスタートは甲羅に似せて穴を掘りの句に就て同君を病床に見舞つた節怡も同じ句を咏みましたよ同君からノートをしめされて少からず驚いた、こ

れは恐らく偶然の暗合であらうけれども自分のノートから抹殺しやうかさうしやうか今だに迷つてゐるやうな譯である、それから

制帽を脱けは一つばし車掌わけ云ふのを作つてさうも誰かの句にありはしなかつたかと思つてゐるが、矢張り夜叉郎君の作に

運轉手帽子をぬけば分けてゐるがある事を同君から聞かされてなる程と思ひ出して、其句を抹殺した、そして何の雜誌へも發表しないでよかつたと思つたりした事があつた。漠然と自信の句云ふ事になるさ相當自分の句集から自選するにしても一寸見當に困るだらうと思はれる。水府鯛坊兩氏には飛んだお引合ひに出して甚だ御迷惑であらうが、こんな事で決して兩氏の鼎の輕重に及ぼすやうな事があるべきでないと思ふればこそ敢てお引合ひに出した次第で、浴後ビール一杯機嫌さんだ泡の飛ばッしりさ御諒解を願ひたい。

自由の立場から

川柳無題提唱

安川久流美

水の無い川に乞食が酔ふてゐる

この一句から、川柳の題といふものをひき出して見るに、却々多い。

水、川、乞食、酔、酒、夏、河原生活、境遇、樂しみ、悲哀、旱、

等、未だく手繰れば出てくる、然し試みに『生活』といふ題が課されて、

いさお互に作らうと身構へる段になるに、オイそれと纏まつた佳句が生れて

来ない、題にこらはれる、殊に初心の人は

『生活が……』云々

冠句のやうに詠むやうになる、これでは更に川柳の妙味がないことになる、其他『夏』といふ範圍の廣い題を出されるにまです、宙に迷ふて強ち題はなくとも句そのものが既に自分の作つた題である——此點に於て私は、あ

くまで無題、即ち雑吟として自由に作つたがよいと思ふ、ある人に言はせるに、無題では作りにくいとか、想の捉み所がないとか、いろいろな説もあるが、それは、川柳習作としての寺小屋であつて、少しでも川柳に手を染めた以上、題詠は必要なのである、題に束縛された揚句が、作者の個性といふものが、表現されて来ない、無妻者が妻の句を作つても見當違ひの句の出来る事は珍らしくない、いつも劍花坊氏の喋舌ることだが『無人島』といふ題に、三人暗合の句があつた。

太陽は無駄に光れり無人島

の句である、作者は言はずもがな、無人島を空想してゐる人々に過ぎないから、これ以上、見て来たやうな嘘はつけないのである。斯うした下附の如き句が、川柳詩としての、ざれだけ價值がある、後世印象としてざれだけの深味がある、大道に富籤類のこををして、一時群衆を興がらすと同じい、遊戯視である、

的がなければ、十七字を擲めないといふ川柳道樂なら、やめたがよい、年々『夏の月』や『春の水』を繰返してゐる月並俳壇は、炎天の頃電でも降らねば、改革されまい、濁り水の文學だ、いつまでも一抱へあれきの柳ではあるまい、柳を詠みたかつたら柳と人間生活のびつたりふれる所を詠めばよい、お序だが俳句にも季題を廢して貰ひたいのだ、古人の名句と同じく参考ならば、是非もない、まして人間生活をるぐつて行く川柳には題詠なき書行燈に等しいものである、

×

私はこの稿を草するに同時に各地柳詠の題詠選を御断りいたします、

(七月十六日)

新戎橋より

万よし生

○雪隠へ面會に行く人はないが、人間へて、遅日莊には何の不思議もなく殆

は雪隠に居るに同様、うんこ氣張つて居る場合、頭を整理して居る時分にだしぬけに訪問せられたり話しかけられたりするに憎いではないが、憤然とする事があるお人よしの人程、精神の統一が出来ない人程、氣の毒なものはない、その極端なものは氣狂ひだが、相當物の分る頭の持主で仕事が出来ないのは精神統一についての工夫が足りないからである、併し精神の統一は言ふが如く單に出来るものでない。佛教徒が斷食をするのも、加賀の千代がぼんぼりすゝゝて寝なかつたのも、白石が冬の夜水を被つたのも皆精神統一の工夫に外ならぬ。

毀譽褒貶などは固より、生死の外に超然たる精神統一三昧に入らんか、火熱からず、氷寒からず、雲を呼び霧を吐き、狐狸を走らし鬼神を動かすこと亦難事にあらず、古來神通力と稱するものこれ、作句の工夫の外に出でず

○青年に乏しきものは思慮分別なり壯年に缺くるものは蠻勇客氣なりそれが近頃轉倒して壯年者に蠻勇あつて青年に却つて分別頗多し、これは時代を率ゐる思想の標語がないからではあるまいか、例へばナザレの天國の如き十九世紀の英國の紳士道の如き、伊太利のフアシュの如き、米國の世界一の如き維新の尊王攘夷の如き熱烈なる時代精神が缺けてゐるのではなからうかどうも産兒制限や禁酒宣傳が時代精神ではいや早や。

革郎氏とぶんく

麻生霞乃女

遅日莊から三軒目の庭に柳の巨木がある。川柳に因んで昔、何の某によつて植ゑられたといふ程の名木ではないが、眞晝の陽を遮つて、空一つぱいに枝を張つてゐる。一時は追剥ぎが出るといふ噂もあつた。雜草が小屋根まで伸びてゐる見るから狐狸の住家とも思はれる物凄いかし家を隣家に控へて、遅日莊には何の不思議もなく殆

き四年の歳月がながれた。夏は涼風を入れるために、遅日莊の二階は夜中頃まで開けはなれて華やかな電燈の光りが庭の高野槇の梢を照してゐても柳の葉は陰鬱として暗かつた。夜が更けてから此物騒な遅日莊の砂を踏んで、よく主人を訪れる人に名探偵シャイロツクホームズといつたのでたちの三好革郎氏がある。環路のやうに南京玉のぶら下つた、シェードの下で氏は主人と相對して話し込むのが例である。海鳥が燈臺の窓へからだを打ちつけて死ぬ様に庭の立櫓からぶんくが飛んで來て電燈のシェードに突き當つて疊へ落ちるのを氏は一つ一つ拾ひ上げて羽根をちぎつて並べた。基石を撒きちらした様に飛行の術を失つたぶんくが疊の上を這ひ廻るのを見ながら、冷たきつた酒に唇を潤してゐる革郎氏を前に私は酒池肉林の樂みに耽つて慘虐を極めた殷の紂王が愚ばれた。彼も又その手始めにはぶんくの羽根をもぎつたであらう。

各地柳壇 松郎編

四〇

琵琶の會姉の順番遅すぎる 放馬
文化村いちち端のが琵琶に凝り 万よし

本社事務所小集(七月九日夜)

万よし川柳(第二十七回)

「植木鉢」

塚崎松郎選

十錢に保證を付ける植 木鉢 紫明
手におへません植木鉢へ訛ひ 案山子
植木鉢買ひかぶつたと思ふ朝 聞治
植木鉢出前の型で下けられる 冬青
宮様 の前に控けた植木鉢 山田
植木鉢忘れられたるここで枯れ 眠聲
植木鉢だけを殘して養子去に 飯山

軸

植木鉢へむいた師匠になやみ 松郎

次回題「短冊」五句 前田雀郎選

八月二十日締切

秀逸には選者短冊を呈す

大阪市南區新我橋南詰万よし宛

半休子居小集

住 夢遊報

仲人も一緒になつた誤解なり 紋太
出戻りのまだその儘で仕立物 同
公園のさある所に椅子があき 同
出戻りさ確かに知れる夏さなり 同
出戻りは何かさ母の方へつき 素生

包み令案外馬鹿にしてやがる 同
出戻りの内氣で居つて日が永い 明鳥
問題を金一封で片付ける 同
總代はさうですかでは歸られず 同
總代は嬉しくもない禮を云ひ 同
仲裁は誤解の顔へ向き直り 南天棒
朝の風呂自分さ外にもう一人 梅雅
朝風呂で叔父の背中の疵を知り 柳芳
献立の通りにすれば金が要り 鎌月
戯れの石が鳥居へうまく乗り 夢遊
朝風呂を歸れば友が待つてゐる 同

万よし偶會(七月一日)

万よし報

人聲さ母さへ琵琶を聴かして居 飯山
大悲劇まだその上に琵琶を弾き 同
三木星花さ角琵琶で食つても 同
琵琶師所稽古の時は汗を拭き 義矢満
琵琶を聴くたびに里野は瘦細り 同
抱きこんだ姿で琵琶を持て来る 二柳子
大道琵琶昔の夢を追ふてゐる 赤丹
叩きつけ引つかけ琵琶を弾いても 三笑

インキ 互 選

欠勤の机へインキ戻しごき 飯山
算盤へインキが付いて罫が引け 同
コツ／＼インキの了ひ音を立 同
インキの香今日も一日働かん 同
文面をきいてインキの栓をこり 同
塗らたてのスタンブ少し無駄押し 同
給仕またインキのしみを叱らる 同
リーダーの三ですインキ壺を提げ 同
青インキはつきり死ぬ書出 眠聲
良い思案出すにインキの蓋を 同
インキ壺傾けてまだ書くつもり 二柳子
乾かないインキ吸取探して居 同
初めての文字へインキが落ちて 同
宿帳に萬年筆の振つたあさ 三笑
赤の方へペンを突込む忙しさ 同
あるがな萬年ペンを振る見る 冷笑
紫のインキに彼女からさ知り 結美
忙しさインキのついた指を見せ 案山子
印刷屋インキの不足聞かされる 山月

椅子 子 互 選

椅子の要る店から見ゆる聲の間 芦穂

二人撮る寫眞一脚椅子が要り 同

新任へ斷つて出す古い 椅子 同

相談に来て簾椅子をすゝめられ 飯山

水撒いたあごにその椅子据ゑられ 同

力なく診察室の椅子に 掛け 同

椅子持つてお出で表は風がある 冷笑

幼稚園椅子から足がぶらさがり 鮎美

まあそこへお掛けご社長せき 眠聲

椅子二つ並べコックは寝る氣 三笑

まあお掛けやすご其椅子空 山月

盗人 互選

盗人の這入つたあした大工が來 飯山

盗人にきこかで碁石崩す音 同

盗人の迂闊手拭落しき 眠聲

板の間の盗人の足でかい事 三笑

貧相な盗人さきへ捕へられ 鮎美

盗人へ刑事時計を突きつけ 山月

次々盗んだ品で呑んでゐる 二柳子

カチワリ屋 蘆穂選

カチワリ屋アイスクリームの先 三笑

晝寝した所を起すカチワリ屋 山月

カチワリ屋呼んで水屋の慌て 同

カチワリ屋冷や銅貨つりに呉れ 鮎美

カチワリ屋箱のこぼれをいれ 同

カチワリ屋さすが妾さ雞を立て 眠聲

カチワリ屋掃除の町を走り抜け 同

カチワリ屋旦那が來てると思ひ 飯山

カチワリ屋呼ぶに忙しい下駄 同

蚊帳を吊る一階見上カチワリ屋 同

(軸)カチワリ屋早横町の聲になり 同

カチワリ屋團扇の指圖へい 同

万よし偶會 (七月十四日)

万よし報

紅生姜もうこれぎりの猪口を受 不及

均一で歸る氣で飲む紅生姜 二天

はぢかみに舌打をするいける口 三笑

折詰の蓋へ生姜が染つてゐる 同

紅生姜さんごのやうな色になり 一路

折詰に思ひがけない紅生姜 同

紅生姜添はて宿屋の朝の膳 同

紅生姜行儀に cand 下へ置き 放馬

梅干のついで生姜は凡で出し 同

紅生姜小供は皿の外へ出し 同

紅生姜 cand 強硬論者なり 万よし

女房がほめられてゐる紅生姜 同

ハジカミの議論へみんな來 同

六厘坊忌 詠草(殘稿)

母 互選

マールクト母はまだく買 一路

里歸りして母親を低う見る 磐樓

父を怖がらして母は連れて來る 二柳子

朝の戸を母は襷になつてから 文久

なに泣くぞ母親の背丸くみる 同

おつこめを濟まし母親膳を出し 眠聲

母一人まだ居残りを待つて呉れ 同

嬉しさを涙に見せる母の年 乾坤

母の帯をこまで云ふ裏をみせ 同

母親が位牌を持つこ意見なり 同

片言を云ふて笑はす母にして 同

母親の口に頬張る握りずし 同

新聞を母親片付ける斗り 飯山

藏へ人れますご母親おさなり 同

このさまわいご母親片付ける 同

母ほかに父縁談を苦にはせず 同

つかへこは云はず母親出と呉れ 同

勸忍の只母があり母があり 同

母は父隣りの鍵をこさづかり 同

母の事は萬事頼んで國を立ち 同

文樂の外は知らない母さなり 同

母の事思はぬにあらす泊つて來 同

命日ご掛金の日を母は出す 同

柳談會雜記

のしよ をそあ

七月十一日
午後一時から
第五回柳談會
が連日莊の二
階で開かれま
した。先月は
雨天でもなか
くの盛會で
したが今日は
日曜ではあ

り、天氣はよし、近く土用の暑さに入
らうとしてゐる矢先に、講演の、作句
の三肩の凝る事よりも、こめかみまで痛
くなる程冷なつた納涼臺のビールの方
がよいと思つたり、涼み芝居の棧敷釣に
ぞつと嬉しさを感じたりして、柳談
會なごは餘程の熱心家でない限りは振向
かれるものでないご、私は一人できめ込
むで村の錢湯へ出掛けました。歸つて見
るに澤山なお召し物が、ずらりと女關の
庭に並んでゐましたので、大急ぎで二階
に上りますご、上り詰めた隅つこに、か

はるさんがお行儀よく、きつちりご座つ
てゐられました。それから一順づらりご
お顔を拜見いたしますご、四疊半の大机
のぐるりに二柳子さん、刀三さん、松郎
さん馬行さんの定連三、八疊の間には飯
山さん案山子さん眠聲さん、冷笑さん等
がゐられた様に憶つてゐます。

美の作さんご英豆さんが來られてか
ら、馬行さんの『植物染料』についてのお
話がありました。女學校の夏季講習會へ
でも出席してゐる様で、そゝろに若き日
が偲ばれました。先月は柳談會の花形で
いらつしやつた美の作さんは黙つて藤椅
子に寄りかゝつてゐられました馬行さん
のお話を俯向き加減に聞いてゐられる飯
山さんの面影が徹底郎さんの何處かに似
てゐる事を私は發見しました。馬行さん
のお話が終わるご雜吟五句を夕刻迄に作つ
て清記互選にする事になりました。夕方
萬よしさんご、ひろしさんご、亞飯さん
ご、十字路さんが來られました。清記役

は馬行さん句は高點句から名を發表して
順次に批評を試みました。神戸の紋太さ
んは句評の時から來られました。

詠草

ひろし(十四點)松郎(十四點)路郎(十三點)
馬行(十二點)刀三(九點)飯山(九點)英豆(八點)
二柳子(五點)萬よし(五點)かほろ(三點)
眠聲(三點)案山子(二點)冷笑(二點)
美の作(二點)蔑乃(二點)

八點

重荷下ろした父の死顔 ひろし

五點

俺に似よ俺に似るご子を思ひ 路郎
逢ふて戻つて父母に手をつく 松郎

四點

歎してもく男生きてる 英豆

三點

社長以下の愛を無し給仕の死 馬行
夕立の中に女房の聲がする 同
蒔蕨の疎る別れごむない 同
「今流行る唄が晝」賣れたら 飯山
おちぶれて子煩悩なる父に成り 同
魚釣りもそりやが首のここ 路郎
寛ろけばあれ以來添そ來た妻 刀三
死んだ父が居る様な氣が日 松郎
いつごなく二人の世間を行く ひろし

二點

喋舌つてる駄中に食ふてゐる 松郎

五錢云ふ靴下を手に取る
子を叱るのにも苦しむやうに
あつてなく反古の持て来る
いづこで泊るか脚絆のほこり
金持たぬ心の怒ろ何の閃く
戸を叩く音の悲緒らしくなり
水すまし浮いて下駄をこすり
不足ばかり人に云ふて深く
ビルデングあれも汚うなる
それもそうかご嫁をさるなり
社長とは違つた愉快さを見
バラソルをたたく歩く鉦の風
祭の子すわるさ小い臍を見せ
自暴自棄只呑む事に日を送り
終點でおろされふご手を行く
社の方の用事もあつて別府に居
(一點の句は略す)

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
二柳子 刀三 萬よし 同 馬郎 路乃 美の作 冷笑 ひろし 眠聲

『川柳には文語體と口語體の句が可なり入り亂れてゐるが、それを統一しなくともよいものか、短歌なごでは喧しい問題になつてゐますのに川柳では一向さうしたことが論議されぬやうですが、こん席の柳談會でこの事についての御高説をうけたまはりたいこの要求がありましたので、最後に三十分間主人が此問題について意見を述べました。その概容を書いて見ます。わたしたちの思想を盛る

のに最も適し、又心聲を表現するのに適するものは、現代我々の持つてゐる言葉でありませう。其意味で、従来の詩歌を一瞥するに、川柳が一番表現の自由さを持つてゐると思ひます。我々の思想感情を盛るのに、文章體をかりる場合には、我々の持つてゐる現代の言葉で表現するよりも誇張になつたり、又言ひたりなかつたりして隔靴搔痒の感があります。川柳は他の詩型に先立つてさうした自由さを持つてゐるのであるから現代人の思想感情を盛るのに最も適した詩であると思ひます。口語體、俗語體の詩が其内容を躍如たらしめる例として、民衆藝術の典型である萬葉集があけられました。萬葉集の歌がいまだに非常な魅力を持つて現代多くの歌人に歡迎されてゐるのは、其當時の人達がそれを持ち合はしてゐる日常語で自己の思想や感情を自由に歌つたからであります。萬葉集には上は殿上人から下は遊女、乞食に至るまであらゆる階級の人達の作品が網羅されてあるのを見て

も、彼等は當時の日用語を以ていかにより詩的情緒を歌つてゐたものであるかわかります。ところが現代の歌人は我々が日常使用してゐる言葉を捨て、寧ろ朝時代の口語を借りて歌を詠み雅言だのみやびやかだの云つてゐます。これら歌人の中でもその點に氣づいて日常のこみばで短歌をよみ、現代語歌として唱導してゐる人もあります。それで歌壇では従来の短歌と口語歌とが可なり喧しい問題になつてゐますが、川柳ではこれまで一向に問題にされないのは、既に早くから現代使用されてゐる日常語を使つて自由になつてゐる特徴を持つてゐるからであります。雅語を用ひる事によつて多くに光る句は別として我々が推奨すべき川柳はつとめて口語體俗語體の句でありたいものです。

あらかた右の様な話でありましたが、わたしでは多少書き足りない點があつて報道の不充分な事について、同席された方々からお叱りを受けるかも知れませんが、これ位でゆるして頂きます。



編 輯 室 よ り

は吉田きよし畫伯です。七月十日から二十日迄丹平ハウスで赤松洋畫研究所の展覽會が開催されましたが吉田畫伯及その門下の

柳川 青明忌

日時 八月二日午後七時

會場 神戸中山手通一丁目市電停留所北

兼題 「記者」 三句 中一 俱樂部

同 「風呂」 三句 紋太郎 選

講演 青明の思ひ出

相元 紋太 駒井美の作

會費 三拾錢 麻生路郎

集會 三拾錢

柳川 涼み船

日時 八月十四日午後七時

集合 大江橋南岸(市廳舎北横手)へ集合の事、七時十分乗船、乗遅れた方は八時までに天神橋の下へ

會費 五十錢

兼題 「衣」

寄贈 ビール其他 松郎 選

▼私は、もう乙の下位な、健康になつて働いてゐます。皆さんに大變心配をかけましたので何より先にお知らせしておきます。わざわざ見舞に來て下さつた方や、見舞狀を下さいました方にあつく御禮を申し上げます。▼七月三日の夜は本社の例會、四日は住吉支部主催の菖蒲園句會、十一日は週日莊で第五回の柳談會を開きました、會者十八名で仲々の盛會でした。八月の柳談會は暑いのので休むことにしました、そのかはり六甲山の上で天幕を張つて柳談會をするかも知れません。例會も昨年のやうに大川に船を浮べてやることになつてゐます。青明忌は神戸で開きます。あつからとて決して怠けはしません。▼前號から表紙を毎號變へることにしました、前號

人達の出品が人目をひいてゐました。本號の表紙は柴谷柴舟畫伯です▼本號は、原稿が輻輳したので次號へ廻はしたのが多い、おゆる

しを乞ふ▼今度六甲支部を廢して西宮支部(幹事黒木炭豆)を新設し鶴町支部を廢して築港支部(幹事喜田飯山)を新設しました近く西宮市で支部開きの句會を、ひらくさうですから同方面の方は進んで、出席されるやう切望します。炭豆まで住所を知らして頂けば御案内を差上げる事となつてゐます。▼中川霧太君病氣のため、青春の選は霞乃が代つていたしました。史風の選は馬行がいたしました悪しからずおゆるし願ひます。▼病氣と言へば史風は未だによくならない。月兎もぶらぶらしてゐる。駒人も入院してゐる。花童子の奥さんも東京で惡ろいさ聞いた。一日も早く仲癒されんことを祈つてゐる。▼朝陽は九州巡り双柳は滿州方面の旅に出た。▼青嶋南江君が大阪市西淀川區海老江町、一三二へ移られた十三日の夜、神戸の覆面の會へ出席した炭豆と刀三が出席してゐた。會が果ててから三人で久し振に新開地を歩いて見た。▼神戸の富田青波君が七月五日午後三時に、大阪の宮地杉々君が十三日の午後七時に亡くなられた。青波君は曾て「権の實」を出してゐた人、杉々君は元番茶話會員であつた共に謹んでお悔み申し上げます。▼青波君の追悼句會は十七日に安養寺で營まれたが私は、差支て出席することが出来なかつた(路郎生)

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するべし。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」ミ封筒に朱記するべし。

▼締切は厳守されし。
▼各地會報は清記のこ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこ。

募集

第三卷第十號課題

八月十日締切

▼枕 前田雀郎選
▼商人 相元紋太選
▼家主 森田輝翠共選
太田朝陽共選

第三卷第十一號課題

九月十日締切

▼割 淺井五葉選
▼柿 林田馬行選
▼皿 廣川番翁共選
三條東洋鬼共選

每號募集

▼近作柳樹(三十句以内) 麻生路郎選
▼各地柳壇(會報) 塚崎松郎編
▼文章(評論研究吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所に宛に願ひます

價定

一部 參拾錢(郵)
六部 壹圓六拾錢(郵)
十二部 參圓(共稅)

料告廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます御不在中でも預ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりぞ御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

大正十五年七月廿五日印刷
大正十五年八月一日發行
第三卷第八號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四番地 廠生 幸 二郎
發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四番地 川柳雜誌社
振替大阪三五一四番

川柳雜誌社事務所

大阪市港區八條通二丁目十一番地
振替大阪七五〇五〇番

店書捌賣
(大阪) 明文堂 公立社 柳屋 岳文堂 和正堂
(東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田 後藤
(金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石塚

「川柳の作り方」改題

木村半文錢氏著



川柳がわかるやうに書いた本をよく聞かれるが、その度に僕は閉口する。何んぞ答へたらいいかに迷ふからである。それは從來此の種の本が一長一短をもつてゐて、推賞するのに我々を躊躇せしめたからである。が川柳作法が一度世に出てから、さうした心配が一掃された。何人から問かれても、すぐにこの書をすゝめるのに躊躇しないからである。文章は平見だし、解釋は親切だし、全く人を得た著書である。尙本書は「川柳の作り方」を改題し、少しく増補したものであるから二重に買つて下さつてはお氣の毒ですから文明文館主は語つてゐるが、川柳界の二潮流、川柳の生活、新興川柳の内容の三項五十餘頁が増補されてゐるから、さうした最近の傾向に就いて知りたい方は更に一讀されたいものである。「川柳の作り方」を見る機會を得なかつた方へは是非本書をお薦めしたい。(路郎生)

四六判洋装函入

四百十餘頁

定價 壹圓八拾錢

送料

内地十二錢
領土三十錢

社主藤堂氏の

ための悪文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焔をあげて、あとであんなことを云はればモツト本が賣れたらうにさ後悔をするところなど仲々うれしいおぢさんである。なんでも社會に貢獻するために本屋をはじめたのださいふてゐるがさうかも知れない。大いに讀んで（大いに買つて）このおぢさんを満足させて下さい。

|| 路 耶 生 ||

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

暑 中 御 見 舞

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

暑中御伺

北海道根室緑町

根室一川吟社
宮田

吟柳

南海電車

暑中御見舞

池澤樂居

暑中御見舞

大阪柳 一

大阪市天王寺區石ヶ辻町一二一

暑中御見舞

久世一路

大阪市港區難波島二丁目
電話櫻川一五五九番

暑中御見舞

北山悟郎
北山十字路

大阪市北區北森町卅二

暑中御見舞

堀

柳和歌山縣田邊社町
楓林

暑中御見舞

熊

本博久
大阪市住吉區平野梅ヶ枝町
五丁目二十九

暑中御見舞

安井ひろし

暑中御見舞

中

澤濁水
高知市本與力町

大阪市南區安堂寺橋通四丁目卅七

暑中御見舞

西村山月

大阪市港區八幡屋町二四八

暑中御見舞

中西久郎

大阪市北區天神橋筋三丁目廿五

暑中御見舞

松本助六

大阪市住吉區平野梅ヶ枝町五

暑中御見舞

竹内多門

大阪市住吉區濱口町三三六

暑中御見舞

馬場月兎

大阪市港區九條通三丁目
大阪信用組合

暑中御見舞

黑田番外

大阪市西區立賣堀北二丁目
株式會社ヤマトメタル商會内

暑中御見舞

酒井駒人

千葉縣四街道小池方

暑中御見舞

岩崎柳路

東京市芝區愛宕町一ノ一六大成社内
電話青山四一九一番

暑中御見舞

森田輝翠

大阪市天王寺區生玉前町八〇

暑中御見舞

西

本
三
笑

大阪市天王寺區東平野町
二丁目(山田重方)

暑中御見舞

新聞雜誌の寫眞版凸版は是非

豐田製版所

大阪市東區德井町二丁目

電話一四八番

暑中御見舞

塚
上
井
崎
松
郎
三

大阪市北區上福島北二丁目
七十八(高橋佐藏方)

暑中
伺中

林
田
馬
行

大阪市外豐中榮通
二丁目(石賀方)

暑中御見舞

橋
本
二
柳
子

大阪市港區八條通二丁目
川柳雜誌社事務所

暑 中 御 見 舞

◀川柳家の御寫眞は是非▶

黒木寫眞館へ

西宮市與古道三四番地

黒木莢豆

暑 中 御 見 舞

庄 萬 よ し

新戊橋より申上候

○當分の内、一信心、二商賣、三川柳ミコースを定め申候。

○我れ川柳の辻ビラミならん、我れ川柳の廂ミならん、我れ川柳のヨハネミならん等ミ誓ひし願ひ破るべからず候。

○萬よし川柳は三光へ呈する白鶴一升を改めて選者各先生の色紙短冊を進呈することに致し候。投句は清記の上選者へ送らるゝものに候。

○萬よし川柳 二十八回、題「短冊」五句、八月二十日締切

前田 雀郎 先生 選

大阪道頓堀新戊橋

庄 萬 よ し

神戸湊川新開地電氣局西

投 句 處

庄 萬 よ し

電 本 二 八 五 六

曇
中
御
伺

溪花坊編輯川柳の雜誌

「大大阪」毎月一日發行菊半截四十頁以上▲表紙竹久夢二畫伯▲諸家の近作と研究文滿載（二部金三十錢）

大阪市北區老松町

大大阪川柳社

電話北二四〇五九番
振込四三五四番

暑 中 御 伺

番 傘 川 柳 社
番 傘 茶 話 會 員 一 同

番 傘

八月 特輯
「一人一頁」號

目 次

(不順序)

——一冊三十錢(郵稅五厘)半々年 一圓七十錢(稅共)——

明日は働かん
川柳の解る妓
へちまの柵
紫陽居漫筆
盛夏篇
復習
帽子
御來遊
寶込みのる
更紗の裏
夏の午後
漫談
浮いた瓢箪
ある夜の其笛堂

紋 南 一 長 歌 五 寛 小 蹄 蝶 波 文 塊 舟
太 北 絃 人 美 葉 汀 郎 二 二 久 人 人 人

大阪市此花區野田驛前

番 傘 川 柳 社

振替七六九四四番

山間 僻話
作れるから作る
所感二つ
笑 茸
夏日 禮讚
清水町まで
愛兒 抄
川柳と僕との因果律
近代人の神經と川柳
最後の福運
句 評
その他、雜吟課題吟
十月號課題(八月二十日締切)
雜 (同人共選) 夕焼 (小太郎選)
擊劍 (舟人選) 一題二十句限)

凡 夢 不 鈍 乾 雲 光 鳥 春 蝶 水
路 網 平 坤 雀 郎 平 三 哉 府

我國が完全なる禁酒國に到達する迄、幾分でも飲酒の害毒を除去せしむる目的を以つて、己むを得ず大酒大食したる私の過去の苦しき經驗からサーマス錠を創製しました。

うんと飲んでも二日酔ひ、悪酔ひは絶対せず翌朝頭腦明晰、能率増進、胃腸健全、澱粉、蛋白、脂肪に對し消化力の強大なることチアスターゼの適量の八倍乃至十六倍



前坊醫學博士實驗推賞

六三亭御主人實驗推賞

東西力士諸君實驗推賞

万よし御主人實驗推賞

(錢 十 三)
(錢 十 五)

特約店

●大阪 高島屋、十合、白木屋、三越、灘萬、堂ビル、フアマシー、マールホ藥局、成見屋藥局

●名古屋 松坂屋、●京都 大丸 賣店

●丹平分店(大阪平野町) 高橋分店(大阪博勞町) 小林大藥房(大阪京町堀) 賣藥會社(大阪土佐堀) 小林大藥房(名古屋廣小路通)

其他全國著名藥店にあり

●親切なる旅館、料理店、飲食店、待合、貸席には必ず備へ付てあります

大阪市東區仁右門町

製劑元

熊谷糖尿腎臟病藥研究所

電話東三五一四番振替大阪七一〇二三番

探偵は……赤埴へ!!

證據 偽證詐害行為隱匿財產特許侵害其他證據蒐集

信用 會社商店資產信用乳母會社商店員雇員調查

所在 家出人拐帶遁亡轉居先不明其他ノ所在搜查

素行 學生會社員雇人ノ素行夫ノ素行妻ノ行狀內偵

婚姻 家柄血統祖先宗教父母ノ性格家庭性格素行學業體質交友趣味嗜好技倆收入資產外必要事項調查

調査は……赤埴へ!!

大阪東區北濱一丁目七番(野村ルビ前濱側)

赤埴探偵社

電話本局二七三番

暑中御見舞

新聞雜誌印刷並ニ圖書出版業

其他美術
印刷百般

藤本兄弟社

大阪市東區農人橋二丁目
電話東一七〇番◇七七〇番

川柳雜誌社同人

主幹

藤生路郎

岩崎 井上 馬場 原史 橋本 西垣 德田 太田 河太

崎柳 藤彦 三造 史馬 本二 田垣 田徹 南田

路造 三兔 風行 馬子 柳雨 雙松 朝底 放馬

龜井 吉川 高橋 高見 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

井花 啞童 子人 骨 穂 聞 郎 豆 臣 馬 六

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

本川 右 助洲 大

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

松柳 矢木 塚崎 竹田 竹内 塚崎 矢木 松柳

(いろは順)

道頓堀支部 天満支部 岸和田支部 築港支部 城南支部 西宮支部 淀川支部

大阪市内南區新戎橋南詰 幹事 庄 萬 一 大阪市内北區南同心町二丁目一 幹事 原 史 岸和田市下野町四一九 幹事 太田 朝 大阪市内港區八幡屋町二九〇ノ二九 幹事 喜田 飯 大阪市内東區餌差町二二一番地 幹事 駒井 美の 西宮市興古道町三二二 幹事 黒木 英豆 大阪市東淀川區南濱町一九四 幹事 西垣 松雨

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

仁川支部 住吉支部 函館支部 東京支部 豐中支部 山口支部 神戸支部

神戸市湊町一丁目電氣局西 幹事 庄 萬 一 山口縣山口町石原小路 幹事 柳川 洲 馬 大阪市内外豐中榮通二丁目石賀方 幹事 林田 馬 行 東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内 幹事 岩崎 柳 路 函館市青柳町五〇 幹事 龜井 花 童子 大阪市住吉區安立町五丁目二二二 幹事 徳田 双 柳 朝鮮仁川仲町二丁目八 幹事 矢田 右 大臣

水了軒のお辨當

旅行…に會集

山をほめ海をたゝへてお辨當



大阪梅
田驛前

水
了
軒

電話 北六四〇番
北一八三四番

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一冊一日發行）
大正十五年七月二十五日印刷 大正十五年八月一日發行

第三卷 第八號（第三十一號）

定價金參拾錢